



日韓国交正常化50周年記念

日本遺産「国境の島吉岐・対馬・五島～古代からの架け橋～」認定記念

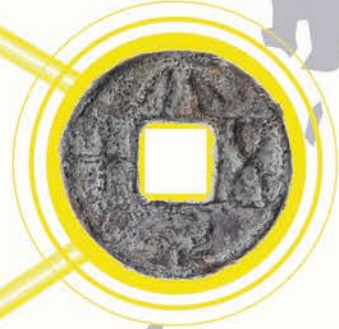
長崎県埋蔵文化財センターと釜山博物館の友好機関協定書締結記念



— 弥生時代中国貨幣からみる交流 —

ロード・オブ・ザ・コイン

平成27年度東アジア国際シンポジウム



長崎会場

平成27年

10月12日 月・祝 14:00～16:30

長崎歴史文化博物館 [1階ホール]

〒850-0007 長崎県長崎市立山 1-1-1

壱岐会場

平成27年

11月14日 土 14:00～15:30

壱岐市立一支国博物館 [3階多目的ホール]

〒811-5322 長崎県壱岐市芦辺町深江鶴亀触 515-1

ごあいさつ

長崎県埋蔵文化財センターでは、今年度から釜山博物館と友好機関協定を結び共同研究を始めるほか、韓国や中国の研究機関との連携協力をさらに強化して、本センターの特色ある取組みの一つである東アジア考古学研究を進めています。

この東アジア考古学研究の成果発信となる今回のシンポジウムは、テーマを「ロード・オブ・ザ・コイン－弥生時代中国貨幣からみる交流－」としています。稲作が導入され、クニグニが形づくられる弥生時代になると、大陸・半島との交流が本格化・活性化し、中国貨幣が朝鮮半島や日本列島各地にもたらされます。このように貨幣が伝わり広まっていった経路は、まさに東アジアの各地をつなぐ交流の道、ロード（Road）であり、本県でも原の辻遺跡をはじめとする弥生時代の遺跡から、しばしば中国貨幣が発見されます。

弥生時代の社会という物々交換の社会というイメージがありますが、最近福岡大学の武末先生は、弥生時代には既に中国貨幣が流通していたという大変興味深い学説を提唱されています。果たして、貨幣は流通していたのか、何のためにもたらされたのか、どのような役割があったのかなどを東アジア的視点で議論を深め、中国貨幣にまつわる様々な謎に迫っていきたいと思います。

結びに当たり、このシンポジウムへの出席をご快諾いただきました講師の先生方をはじめ、関係の皆様にご心から感謝を申し上げますとともに、今回のシンポジウムを契機に、日本と韓国・中国との交流がますます深まりますことを祈念いたしまして、ごあいさつといたします。

長崎県埋蔵文化財センター 所長

山本 忠敬

目次

古代中国のお金のうつりかわり.....	01 頁
原の辻遺跡出土中国貨幣と交易関連遺物.....	02 頁
長崎県の弥生時代遺跡出土中国貨幣	
長崎県埋蔵文化財センター 古澤義久.....	03 頁
東北アジアの古代中国貨幣	
財団法人 嶺南文化財研究院 権旭宅.....	10 頁
〔翻訳〕.....	16 頁
弥生時代中国貨幣の機能・用途	
福岡大学 武末純一.....	22 頁
一支国原の辻遺跡における交易	
長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所 安楽勉.....	29 頁
講師プロフィール.....	33 頁

このレジメ作成にあたっては次の方々・機関のご協力を得ました。記して感謝申し上げます。

秋葉鉄雄、下川達彌、壱岐市教育委員会文化財課、対馬市教育委員会文化財課

古代中国のお金のうつりかわり

西暦	日本	朝鮮半島	中国	貨幣の萌芽的段階	
B.C. 400	縄文時代 弥生時代前期	青銅器時代	殷周春秋 B.C.403 貝貨 貨幣の起源の一つに南方の海で採れるタカラガイがあります。お金や財産に関わる漢字の多くに「貝」が用いられるのはこのためだといわれます。有力者の墓などから出土し、一般に流通するものではなかったようです。		
B.C. 300	弥生時代中期	初期鉄器時代	戦国時代 楚 蟠鼻銭 魏 円孔円銭 韓 布幣 趙 農具(スコップ)の形から作られました 秦 方孔円銭 齊 刀幣 燕 ナイフの形から作られました。方孔円銭 戦国半両	さまざまな形の青銅貨幣が使用された時代	
B.C. 200		衛満朝鮮	秦 B.C.221 秦半両 戦国の世を終わらせた秦の始皇帝は度量衡(長さ・容量・重さの単位)の統一や焚書坑儒と呼ばれる思想統制などさまざまな統一事業を行いました。貨幣についても半両銭に統一されることとなりました。	半両銭の時代	
B.C. 100		原三國時代	前期 B.C.206 榆莢半両 八銖半両 (B.C.186~) 四銖半両 (B.C.175~) 中期 B.C.108 三銖銭 (B.C.140) 有郭半両 (B.C.136~) 後期 前漢五銖 (B.C.118~) 前漢五銖(磨辺銭)	漢の劉邦は半両銭鑄造を民間にも任せためニレの実の莢のように小さな「榆莢半両」とよばれる半両が発行されてしまいました。そこで、呂后は秦半両を基にした「八銖半両」を発行します。その後、文帝・景帝代には見本を示した上で民間に鑄造させた「四銖半両」が発行されます。武帝代には「三銖銭」や「有郭半両」が発行されました。	五銖銭の時代
A.D. 1	弥生時代後期	楽浪郡	王莽新 A.D.8 大泉五十 (A.D.7~) 契刀五百 (A.D.7~) 貨泉 (A.D.14~) 貨布 (A.D.14~) 前漢を滅ぼした王莽は新という国を立て、従来の五銖銭を廃止します。王莽は周の政治を理想とし復古主義的政策を行いましたので、古い形態の貨幣を発行しました。4次にわたる貨幣改革を行い、経済は大混乱に至りましたが、大泉五十や貨泉は多く発行されました。	王莽銭の時代	
100			前期 A.D.25 後漢五銖 (A.D.40~) 後漢 赤眉の乱により新は倒れ、光武帝により再び漢が復活しました。紀元後40年には再び五銖銭が発行されるようになりました。後漢の終わり頃になると政府の統制力が低下すると、丸ノミなどで五銖銭などを打ち抜き変造した貨幣がみられます。外側を縦環銭、内側を剪輪銭と呼びます。	五銖銭の時代	
200			後期 前漢では「銖」の傍の上部が角ばっていますが、後漢では丸みをおびています。また、「五」の字も直線的なものから丸みをおびたものに変化します。 後漢五銖(縦環銭) 後漢五銖(剪輪銭)		
	卑弥呼の時代	帯方郡	三國時代 A.D.220 魏 五銖銭 呉 大泉五百 蜀 太平百銭 後漢が倒れ、魏・呉・蜀が覇権を争う三國時代になるとそれぞれの国ごとに貨幣が鑄造されましたが、発行量は限られ、漢代の五銖銭が引き続き使用されました。		

※貨幣鑄造の年代については諸説あります。(作成:前田加美・古澤義久 貨幣画像典:「初心者の為の古文銭」<http://www.5d.biglobe.ne.jp/~kosen/>)

原の辻遺跡出土中国貨幣と交易関連遺物



五銖錢〈不條地区〉



大泉五十〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈八反地区〉



貨泉〈石田高原地区〉



貨泉〈高元地区〉



青銅製權（棹秤の錘）〈原地区〉



板状鉄斧〈八反地区〉

長崎県の弥生時代遺跡出土中国貨幣

長崎県埋蔵文化財センター 古澤 義久

I. 長崎県における中国貨幣の出土状況

これまで、知られている長崎県内弥生時代中国貨幣の状況は、表1、図1のとおりである。近年の発見・研究成果としては、長崎県埋蔵文化財センターが原の辻遺跡出土不明銭2点の透過X線分析を行い、ともに貨泉であることが判明したことと、原の辻遺跡出土遺物に対する再整理を行い、石田高原地区で貨泉1点が出土していたことが判明したこと、また九州大学がカラカミ遺跡を発掘し、貨泉1点が発見されたことなどが挙げられる。

II. 貨幣が埋没した時期はいつか

長崎県内でこれまで確認された中国貨幣の中で、もっとも古い事例であろうと考えられるのが原の辻出土前漢五銖銭であり、本来、弥生時代中期の遺構に伴うものであったと考えられている。貨泉については埋没時期に幅があるようである。シゲノダン例は、高倉洋彰や橋口達也によると共伴青銅器から弥生時代後期初頭～前半の時期であるとされ（高倉1989、橋口2003）、貨泉鑄造後ほどなく対馬にもたらされたものであるとみられる。一方、多くの貨泉が出土している原の辻では、埋没時期が比較的確実性の高い事例として八反地区土器溜で弥生後期中葉～後葉の壺（図1-i）に入った状態で発見された貨泉（図1-10）が挙げられる（宮崎2004）。近辺で出土した3点の貨泉の埋没時期も同様であろう。原の辻では濠や溝、包含層から貨泉が出土する事例が多く、濠等ではさまざまな時期の遺物が混入するため、時期決定が困難である。しかし、環濠の埋土から出土する貨泉は比較的上部で出土する例が目立つ。古い遺物が新しい時期に埋没することはよくあることなので、埋土形成時期が新しいからといって、埋没時期も新しいとは限らないが、弥生時代後期後半から古墳時代初頭に形成された埋土から多くの貨泉が出土することは注目されてよい。このことは原の辻だけでなくカラカミや車出でも認められる。岡山市高塚遺跡出土例など弥生時代後期前葉に貨泉が埋没している状況も認められるので、王莽新に近い時期に埋没した貨泉も存在するが、高倉洋彰や橋口達也が指摘するとおり原の辻など北部九州を中心に弥生時代後期後半～終末期に属する貨泉も存在すると考えられる（高倉1995、橋口2003）。

III. 中国貨幣をもたらした人物は誰か

渡来遺物である中国貨幣は、渡来した人々を介在して長崎県域にもたらされたとみた場合、原の辻における中国貨幣の分布と外来系土器の分布（古澤2010）の重なりが重要である（図2）。原の辻では西側低地の八反地区で11点（大泉51点、貨泉10点）、北西側低地の不條地区で1点（五銖銭1点）、丘陵北部の高元地区で3点（貨泉3点）、東側低地の石田高原地区で1点（貨泉1点）が出土しており、西側低地部での出土が目立つ。これと外来系土器の分布を比較すると、最も近い分布を示すのが楽浪・遼東系土器の分布である。従って、中国貨幣の流入に際しては、楽浪人が関与した可能性が最も高いものと考えられる。また、貨泉が出土した瀬のサエ（図1-ii）、車出、カラカミでも楽浪系土器がみられ、やはり楽浪人との関係が想定される。なお、王仲殊は倭人が楽浪郡・帯方郡へ貿易に行き、物々

交換を主としながらも補助的に中国貨幣が使用され、倭に持ち帰ったという可能性について述べている（王仲殊 1998）。

IV. 出土中国貨幣構成比率の謎

長崎県域から出土する中国貨幣はその大部分が王莽新代の貨泉である。これまで日本列島の弥生時代遺跡から出土する中国貨幣についての集成は幾度かなされているが、やはり貨泉が圧倒的に多く、長崎県域で出土した中国貨幣の組成は日本列島の全国的な傾向と一致する。このことは早くから指摘されており、王莽の積極的な外交方針が強く周辺部に反映したためであるとする意見もある（日比野 1980 など）。

しかし、ここで問題となるのは、北部九州では貨泉の埋没時期が王莽新よりずっと遅い後漢後期～魏晋代に併行する弥生時代後期後葉・末頃に該当するものが存在するということである。このような状況に対して貨泉等の王莽銭が後漢代はもとより後世まで流通した、あるいは後漢代に貨泉が私鑄されていたので、そのような貨泉が日本列島にもたらされてきたという見解（橋口 1988、高倉 1989 など）が多くみられた。

それでは、中国貨幣が貨幣として流通していたことがほぼ確実な地域である楽浪郡・帯方郡や遼東郡・玄菟郡における後漢代の貨幣の構成比率はどのようになっていたのだろうか。そのためには、一括埋蔵銭（窖蔵銭）を調べるのが最も理想的な方法だが、当該地域・時期の報告例はほとんどない。そこで、次善策として墓葬への一括副葬例を確認すると表 2、3 のとおりである。これをみると王莽新代には王莽銭が副葬される一方、後漢代以降には五銖銭が多く副葬され、貨泉等の王莽銭が副葬されることはあっても極少量に留まる。後漢代～西晋前期の墓で王莽銭しか出土しない事例も散見されるが、そのような副葬事例ではそもそも出土点数が少なかったり、盗掘を受けている事例もあるので、本来の流通銭種構成を反映していない可能性が高い。以上から、基本的に五銖銭が流通し、少数の王莽銭などが加わるというのが、後漢代以降の流通銭種構成であったと判断される。後漢建武 16（紀元 40）年に再び五銖銭が制銭とされたのであるから、このような銭種構成となるのは当然のことであるが、その当然の状況を軽視し、後漢代の王莽銭の存在のみを過度に重視した議論がなされてきたのである。弥生時代後期後葉・末以降に流入する中国貨幣は確率論的には五銖銭でなければ不自然なのであるが、そのような五銖銭出土例は庄内式期・布留式期を前後する時期の福岡市西新町遺跡 12 次調査 96 号住居址、豊岡市田多地引 7 号墓、洲本市宇山牧場 1 号墓などがわずかに知られるのみで少なく、時期も古墳時代に入る。それでは、日本列島出土中国貨幣に貨泉が多く、それが弥生時代後期後葉・末頃に埋没する事例が存在するという現象はどのように把握されるのだろうか。次の 3 種の可能性を考えてみた。

- ①案：王莽新代（弥生時代後期前葉）に鑄造された貨泉がほどなく日本列島に流入したが、200 年程度、伝世し、弥生時代後期後葉頃に廃棄された。
 - ②案：後漢後期～魏代に公鑄・私鑄を問わず一部流通していた貨泉が意図的に選び出され、日本列島に流入し、ほどなく廃棄された。
 - ③案：弥生時代後期後葉頃に形成された土層から出土する貨泉は、本来全て弥生時代後期前葉に廃棄されたもので、後に混入したものである。
- ③案については近畿・瀬戸内地方では、弥生時代後期初頭・前葉時期の遺構・土層から貨泉が出土

する例も少なくないので（森岡 2003、寺沢 2003）、可能性があるが、北部九州ではシゲノダン例以外になかなか類例を得られていない実情がある。①案については、伝世させるような用途を考えがたいとする指摘（高倉 1995）が既にある。そのため、俄かには信じがたいが②案を採用せざるを得ないと筆者は判断したことがある（古澤 2011）。弥生時代後期後半～終末期に貨泉のみからなる数組の緡銭が渡来したという意見もあるが（高倉 1995）、もし、そうした緡銭が存在するならば、意図的に選択し作成された緡銭だったということになる。しかし、このような選択行為の原因がわからないので、③案にも妥当性が感じられるところであり、今後の出土事例に期待したい。

V. 中国貨幣流通論に対して

水野正好は貨泉の出土が主港津に集中することから日漢・日韓間の交易において貨幣として機能していたと述べた（水野 1990）。武末純一は中国貨幣の様相について日本列島と韓半島南部では拠点集落遺跡より海村から出土する例が多いこと、海村では墳墓ではなく日常生活域から出土することから威信財ではなく日常的な活動の中で用いられたとし、交易の場で中国銭貨を対価として使用した可能性が高いと述べた（武末 2008ab、2009）。宮崎貴夫は原の辻では楽浪郡や韓から来た商人・使節などの人々の間で通貨として局部的に使用された可能性を想定している（宮崎 2009）。

果たしてこのような貨幣流通論は成り立つのであろうか。対価としての利用であれば、その構成銭種及び比率は、同時期の楽浪郡・帯方郡や遼東郡・玄菟郡と一致しなければならないが、そうではない。また、遼東郡・玄菟郡、楽浪郡・帯方郡の城址・集落・墓葬で出土する中国貨幣は、しばしば紐を通した緡銭の状態出土しており、一般的に緡銭として流通していたことがわかるが、日本列島で緡銭状態であった可能性があるのは宇部市沖ノ山例と岡山市高塚例のみであり、その他の遺跡では計数貨幣としてはあまりに出土点数が少ない。

IVで述べたとおり、②案を支持するならば、意図的に貨泉を選別した上で、日本列島に搬入されたこととなり、中国貨幣は流通手段としてではなく、それ自体が輸出品であったとみななければならない。宮崎貴夫は原の辻出土の中国貨幣について土器溜や濠に廃棄される例が多く、祭祀に使用された可能性を考えており（宮崎 2004）、流通以外の用途があったことが想定される。

貨幣流通論がもし成り立つとすれば、IVの①案や③案を支持しなければならないが、そうであっても王莽新やその直後に併行する弥生時代後期初頭・前葉という短い期間にのみ適用可能で、魏志倭人伝の時代一弥生時代後期後葉・末一には適用困難であると考えざるをえない。さらに、三国志魏書東夷伝弁辰条にみえる「国出鉄韓濊倭皆從取之諸市買皆用鉄如中国用錢又以供給二郡〔弁辰の〕国々では鉄を産出する。韓・濊・倭がみな鉄を取っている。どの市場の売買でもみな鉄を用いていて、中国で錢を用いているのと同じである。そしてまた〔鉄を楽浪・帯方〕二郡にも供給している。」という記述や出土する規格化された棒状（板状）鉄斧（東 1999）（図3）などは漢・魏の錢遣いとは異なる物品貨幣体系が弁辰韓に存在したことを推察させ、三韓や、より南の倭が、楽浪郡等と同じ貨幣体系下にあったとは限らないものと考えられる。

未発表資料使用をご許可いただいた対馬市教育委員会文化財課、護国神社境内遺跡についてご教示いただいた下川達彌先生に感謝申し上げます。

文献

- 東 潮 1999 『古代東アジアの鉄と倭』 溪水社
- 岡崎 敬 1982 「日本および韓国における貨泉・貨布および五銖銭について」『森貞次郎博士古稀記念古文化論集』 上巻
- 高倉 洋彰 1989 「王莽銭の流入と流通」『九州歴史資料館研究論集』 14
- 高倉 洋彰 1995 「弥生時代の銅銭の渡来」『出土銭貨』 3
- 武末 純一 2008b 「日韓の中国銭貨」『平成 20 年度九州史学会大会シンポジウム・研究発表要旨』
- 武末 純一 2009 「三韓と倭の交流」『『三国志』魏書東夷伝の国際環境』 国立歴史民俗博物館研究報告第 151 集
- 寺沢 薫 2003 「時は銭なり」『初期古墳と大和の考古学』 学生社
- 橋口 達也 1988 「2. 半両銭・貨泉について」『新町遺跡Ⅱ』 志摩町文化財調査報告書第 8 集
- 橋口 達也 2003 「炭素 14 年代測定法による弥生時代の年代論に関連して」『日本考古学』 16
- 日比野丈夫 1980 「古銭」『新版考古学講座』 9 雄山閣
- 古澤 義久 2010 「沓岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』
- 古澤 義久 2011 「東北アジアからみた原の辻遺跡出土中国貨幣の諸様相」『長崎県埋蔵文化財センター研究紀要』 1
- 水野 正好 1990 『日本文明史 2 島国の原像』 角川書店
- 宮崎 貴夫 2004 「長崎県沓岐出土の弥生時代中国銭貨」『出土銭貨』 20
- 宮崎 貴夫 2009 「沓岐・原の辻遺跡と出土銭貨」『出土銭貨研究の課題と展望』
- 森岡 秀人 2003 「貨幣」『東アジアと日本の考古学Ⅲ交流と交易』 同成社
- 高久 健二 2005 「勒島遺蹟 出土 楽浪系遺物の 性格」『三国志 魏書 東夷伝 泗川 勒島遺蹟』
- 権 旭 宅 2013 『韓半島・中国 東北地域 出土 秦・漢代 貨幣の 展開と 用途』 嶺南大学校硕士学位論文
- 武末 純一 2008a 「茶戸里遺蹟と 日本」『茶戸里 遺蹟 発掘 成果と 課題』
- 朴 善 美 2009 『古朝鮮と 東北亞の 古代 貨幣』
- 王 仲 殊 1998 「論漢唐時代銅銭在辺境及国外的流伝」『考古』 1998-12

表 1 長崎県内弥生時代遺跡出土中国貨幣

地区	番号	遺跡	出土地区	遺構・層位	種類	出土年度	共伴遺物	推定埋没年代
対馬	1	シゲノダン遺跡		埋蔵遺構	貨泉	1967	双獣付十字形把頭金具 1 点、粟粒文字形把頭金具 2 点、馬鐸 1 点、鏢形金具 1 点、異形細形銅劍 1 点、中広銅矛 1 点、鉄劍 5 点、鉄矛 1 点、鉄鏃 3 点、鉤状鉄器（釣針） 3 点、鉄製ヤリガンナ 2 点、鉄製刀子 1 点とともに出土した青銅製鞘先状金具の中に貨泉	弥生時代後期初頭～前半
	2	瀬のサエ遺跡		河川跡	貨泉	2003	弥生後期～古墳前期土器、楽浪系滑石混和土器	弥生後期
沓岐	3	カラカミ遺跡	カラカミ	環濠 4a 層	貨泉	2011	高三瀝式～下大隈式土器	下大隈式段階
	4	車出遺跡	車出	包含層	貨泉	1998	弥生後期土器	弥生後期
	5	車出遺跡	戸田	D 区-4 V 層	貨泉	2002	弥生後期～古墳初頭土器、楽浪系土器	弥生後期～古墳初頭
	6	原の辻遺跡	高元	第 1 層最上面	貨泉	1951	弥生後期中頃～終末期土器、鉄斧、鉄釣針、青銅鏃、ガラス小玉、鹿角製管玉等	弥生後期中葉～終末頃
	7	原の辻遺跡	高元	1 号溝（環濠）中層	貨泉	1993	弥生中期・後期・古墳初頭土器、瓦質土器、鑄造鉄斧	弥生後期～古墳初頭
	8	原の辻遺跡	不條	D 区 2 号濠	前漢五銖銭	1998	（2 号濠）弥生中期中葉・古墳初頭土器、陶質土器（周辺の土坑）弥生中期主体	弥生中期土坑に伴う五銖銭が弥生後期の濠に混入した可能性
	9	原の辻遺跡	八反	E 区土器溜 I 層	貨泉	1999	須玖 I 式新～後期末土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器	弥生後期
	10	原の辻遺跡	八反	E 区土器溜 I 層	貨泉	1999	弥生後期中葉～後葉の壺の中に貨泉	弥生後期中葉～後葉
	11	原の辻遺跡	八反	E 区土器溜 III 層	貨泉	1999	須玖 I 式新～後期末土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器	弥生後期
	12	原の辻遺跡	八反	2 号旧河道 II 層	貨泉	1999	弥生中期～古墳前期土器、粘土帯土器、楽浪系瓦質土器、三韓系瓦質土器	本来隣接する土器溜に伴う可能性
	13	原の辻遺跡	八反	E 区 II 層	大泉五十	2000	近世・近代層	下層の弥生時代層からの混入
	14	原の辻遺跡	八反	コヨウ 4 区 5 層	貨泉	2001	SD 5 を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
	15	原の辻遺跡	八反	コヨウ 4 区 5 層	貨泉	2001	SD 5 を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
	16	原の辻遺跡	八反	コヨウ 4 区 5 層	貨泉	2001	SD 5 を覆う層	弥生後期末～古墳初頭
	17	原の辻遺跡	八反	5 号濠（SD 5）上層	貨泉	2001	弥生中期中葉～古墳初頭土器、粘土帯土器、楽浪系土器、三韓系瓦質土器、陶質土器	SD 5 埋没最終段階である弥生後期末～古墳初頭
	18	原の辻遺跡	石田高原	B 区 5 層	貨泉	2004	古代～近代層	下層の弥生時代層からの混入
	19	原の辻遺跡	高元	包含層	貨泉	2006	弥生中期～古墳初頭土器、粘土帯土器、三韓系瓦質土器、楽浪系瓦質土器	弥生後期～古墳初頭
	20	原の辻遺跡	八反	1 号溝（SD 1） 8 層	貨泉	2007		
	21	原の辻遺跡	八反	1 号溝（SD 1） 8 層	貨泉	2007		
	長崎	22	護国神社境内遺跡		貝層	貨布	1953～54年頃	表面採集（信頼性に困難あり）

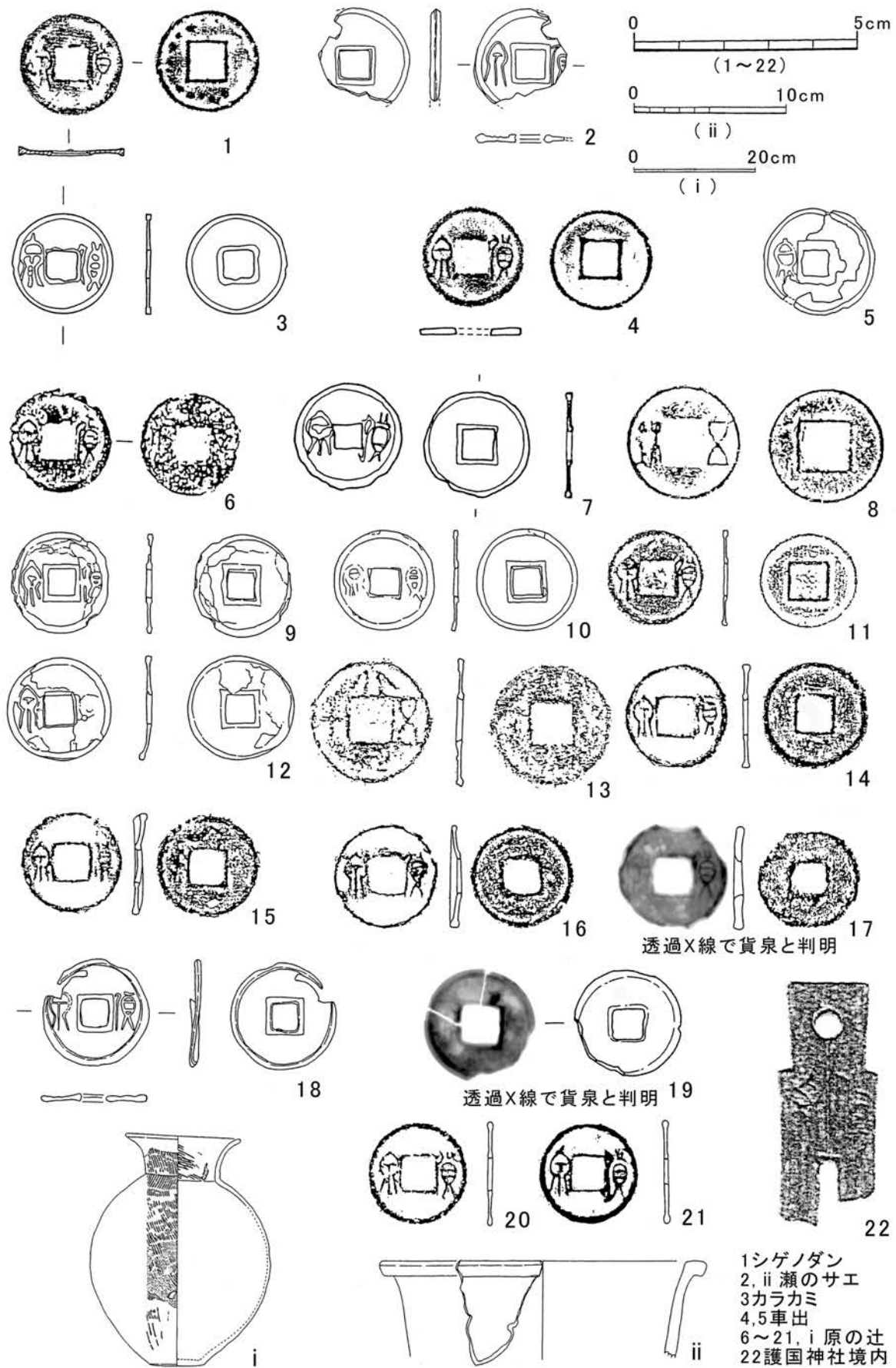


図1 長崎県内弥生時代遺跡出土中国貨幣と関連遺物（1～22は表1と対応）

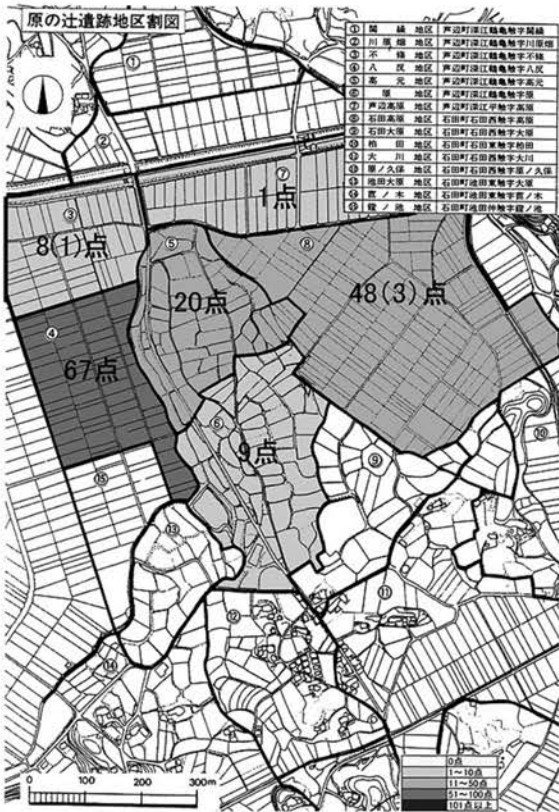
- 1シゲノダン
- 2, ii 瀬のサエ
- 3カラカミ
- 4, 5車出
- 6～21, i 原の辻
- 22護国神社境内



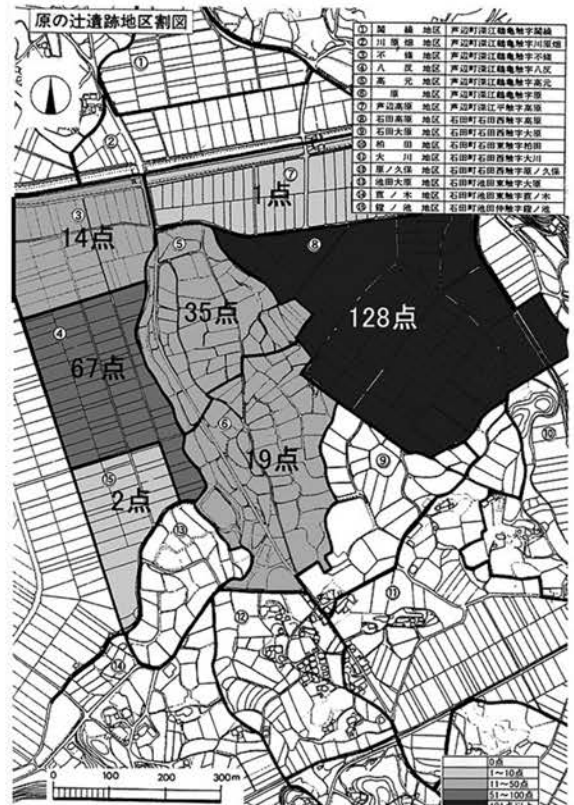
□五銖銭 △大泉五十 ○貨泉 ●貨泉(複数点)
番号は表1と対応
原の辻遺跡中国貨幣の分布



韓半島南部粘土帯土器・模倣土器



楽浪・遼東系土器 ()内は滑石混入土器



三韓系瓦質土器

図2 原の辻遺跡出土中国貨幣と外来系土器の分布

表2 後漢代以降の遼東郡・玄菟郡墓地副葬貨幣

時期	所在地	墓地	半兩	大泉五十	貨泉	五銖
王莽新	遼陽市	唐戸屯 M62 左室			13	
	遼陽市	唐戸屯 M62 右室			48	
	大連市	前牧城駅 M1		32		
王莽新・後漢初	大連市	姜屯 M38			8	
	大連市	姜屯 M14				2
	大連市	姜屯 M17				21
	大連市	姜屯 M19				19
	大連市	姜屯 M36				82
	大連市	姜屯 M41				255
	大連市	姜屯 M45				12
	大連市	姜屯 M48				22
	大連市	姜屯 M55				19
	大連市	姜屯 M61				184
	大連市	姜屯 M13				25
後漢前期	大連市	姜屯 M46		1		
	大連市	姜屯 M84				1
	大連市	姜屯 M134				1
	大連市	姜屯 M142				1
	大連市	前牧城駅 M801		1		1
	大連市	沙崗子 M2				1
後漢中期	營口市	九龍地後漢墓			1	95
	瀋陽市	伯官屯 M2		1		10
	瀋陽市	上伯官 M3		2		
	遼陽市	肖夾河 M2				5
	遼陽市	旧城東門里墓	1			117
後漢中・後期	撫順市	小甲邦 M1				17
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M2				5
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M4				2
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M7				16
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M8		1		39
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M9				17
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M10 側室				17
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M10 主室				75
	瀋陽市	熱鬧路天主教修女院 M11				16
	瀋陽市	大南街 M1		1		12
	瀋陽市	小東 M7				12
	瀋陽市	小東 M14				3
	大連市	姜屯 M20				64
	大連市	姜屯 M42				3
	大連市	姜屯 M71				4
	大連市	姜屯 M73				13
	大連市	姜屯 M155				4
大連市	姜屯 M190				4	
大連市	沙崗子 M5				9	
後漢後期	瀋陽市	大南街 M2				10
	遼陽市	南郊街後漢壁画 M2				2
	遼陽市	南郊街後漢壁画 M3		1		100余
	大連市	沙崗子 M1				1
	大連市	沙崗子 M3				1
後漢	博川郡	德星里 1 号墓				38
	撫順市	中央路 M1				7
	大連市	南山裡 M2				20
	大連市	南山裡 M4				2
	大連市	南山裡 M5				2
	大連市	南山裡 M6				2
	大連市	刁家屯				28余
後漢末・魏・晋	遼陽市	南雪梅村壁画 M1		1		314
	遼陽市	南雪梅村壁画 M2		1		193
	遼陽市	棒台子壁画 M2				41
	遼陽市	三道壕壁画 M1		2		55
	遼陽市	三道壕壁画 M2				102
	大連市	馬圈子 M2				11
	大連市	馬圈子 M3		1		17
魏・晋	大連市	宮城子 M52				15
	瀋陽市	伯官屯 M1				2
	瀋陽市	伯官屯 M4	1			2
	瀋陽市	伯官屯 M6				10
	瀋陽市	陳相屯				1
西晋前期	遼陽市	南環街壁画墓		1		87
	大連市	宮城子石板 M721				1
	瀋陽市	東陵上伯官墓		2		
	遼陽市	三道壕西晋 M7				3
	遼陽市	三道壕西晋 M8	1	2		
遼陽市	三道壕西晋 M9				1	
	上王家村				○	

表3 後漢代以降の楽浪・帯方郡墓地副葬貨幣(高久2005改変)

時期	所在地	墓地	半兩	大泉五十	貨泉	五銖
1世紀前葉~中葉	平壤市	貞梧洞 9 号墓				1
1世紀後葉~2世紀中葉	平壤市	貞梧洞 19 号墓				1
	平壤市	貞梧洞 2 号墓				1
	平壤市	東山洞 2 号墓	○	○		○
2世紀~3世紀	平壤市	楽浪洞 23 号墓				300余
	平壤市	石巖里 120 号墓				384
2世紀中葉	平壤市	石巖里古墳				○
	平壤市	土城里 45 号墓				2000余
	平壤市	石巖里 218 号墓				10
2世紀後葉	平壤市	南井里 120 号墓	4	8 ?		3
	平壤市	貞梧洞 12 号墓				60余
	平壤市	貞梧洞 3 号墓				2
2世紀後葉~3世紀前葉	平壤市	南井里 116 号墓			2	85
	平壤市	土城洞 2 号墓				6
	平壤市	南井里 53 号墓				10
	平壤市	貞梧洞 162 号墓				26
	平壤市	貞梧洞 170 号墓				8
	平壤市	貞梧洞 17 号墓				14
2世紀後葉~3世紀	平壤市	土城洞 15 号墓				14
	平壤市	楽浪洞 15 号墓				6
	平壤市	楽浪洞 43 号墓				4
	平壤市	貞梧洞 25 号墓		1		67
	平壤市	土城洞 61 号墓				30
	平壤市	貞梧洞 27 号墓				1
	平壤市	貞梧洞 38 号墓				30
	平壤市	貞梧洞 245 号墓				45
	平壤市	楽浪洞 17 号墓				2
	平壤市	南寺里 4 号墓				20
	平壤市	南寺里 18 号墓				30
	平壤市	南寺里 30 号墓				4
	平壤市	土城洞 54 号墓				3
	平壤市	楽浪洞 33 号墓				2
	平壤市	南寺里 28 号墓				3
	平壤市	南寺里 29 号墓				10
	平壤市	楽浪洞 14 号墓				30
	平壤市	南寺里 27 号墓				30
	平壤市	南寺里 154 号墓				50余
	2世紀末~3世紀前葉	平壤市	道济里 50 号墓			
平壤市		貞梧洞 1 号墓			2	33
3世紀前半	鳳山郡	養洞里 3 号墓		4	1	59+
3世紀中葉~4世紀	銀波郡	金大里 3 号墓				1
	平壤市	楽浪洞 19 号墓				1
3世紀中葉~4世紀中葉	平壤市	石巖里 309 号墓				○
	平壤市	勝利洞 95 号墓				35
	平壤市	勝利洞 99 号墓				1

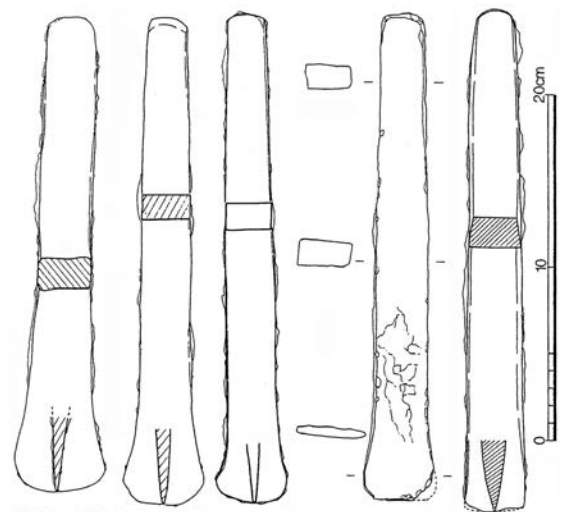


図3 韓・日出土棒状(板状)鉄斧

동북아시아의 고대 중국화폐

(재) 영남문화재연구원 권옥택

I. 머리말

東北아시아에서 출토된 貨幣는 청동기시대의 貝貨와 石貨, 戰國時代에 주조되는 것으로 알려진 刀幣와 布幣, 秦, 漢의 法定貨幣였던 半兩錢, 五銖錢, 王莽錢 등이 있다. 특히 漢代貨幣는 최근 들어 출토 수량이 증가하고 있을 뿐 아니라, 鑄造와 關聯된 文獻記錄과 中國 洛陽 燒溝漢墓 出土 五銖錢 分類¹ 등을 통해 遺構와 公반유물의 絶對年代를 결정하는 자료로 활용되고 있다.

中原地域에서 鑄造, 流通된 貨幣의 용도는 당시의 역사, 문화, 경제 등을 기록한 『秦律』, 『史記』, 『漢書』 등에서 확인할 수 있다. 화폐는 商品經濟를 媒介하고, 小農민的 宗族을 基盤으로 하는 專制 國家의 財務行政 運用에 必要한 道具로서 活用되었던 것으로 추정된다². 반면, 韓半島 南部에서는 墳墓, 住居地, 貝塚, 祭儀遺構 등 다양한 유구에서 출토되어 당시 한반도 남부에서의 화폐사용이 중국 중원지역과는 다르다는 사실을 추정할 수 있게 한다.

II. 화폐의 종류와 출토유적

半兩錢은 『史記』 「秦始皇本紀」와 「平准書」에 紀元前 336年 (惠文王 2年) 처음으로 鑄錢하였다는 기록이 나오는데, 이 때 주조된 것이 半兩錢으로 추정된다. 크게 統一 秦 半兩, 八銖半兩, 四銖半兩 등으로 나눌 수 있다. 이 후 紀元前 118年 漢 武帝가 五銖錢을 發行하기 前까지 사용된다. (表 1) 五銖錢은 漢 武帝가 發行한 郡國五銖錢을 시작으로 621年 開元通寶가 鑄造되기 前 까지 약 700年間 사용된다. 王莽錢은 王莽에 의해 단행된 화폐개혁에 의해 주조된 大泉, 貨泉 등을 일컫는 말로, 짧은 기간동안 발행되었지만 주조량이 많아 한반도, 일본 등지에서도 많은 수량이 확인된다.

동북아시아에서 화폐가 출토된 유적은 중국 동북지역의 大陵河流域, 遼河流域, 遼東半島, 松花江流域, 鴨綠江流域을 비롯하여 韓半島까지 약 80 곳에 달한다. (圖 1) 中國 東北地域의 경우 墳墓, 住居地, 城地 등에서의 出土가 주를 이루는 반면 韓半島의 경우 墳墓 出土品이 大多數를 차지한다는 차이점이 있다.

¹ 中國社會科學院考古研究所, 1959, 『洛陽燒溝漢墓』, 科學出版社.

² 宮澤知之, 2011, 「中國古代における錢貨統一の諸段階」, 『古代における東西の錢と文字瓦』

第 1 章 基調講演.

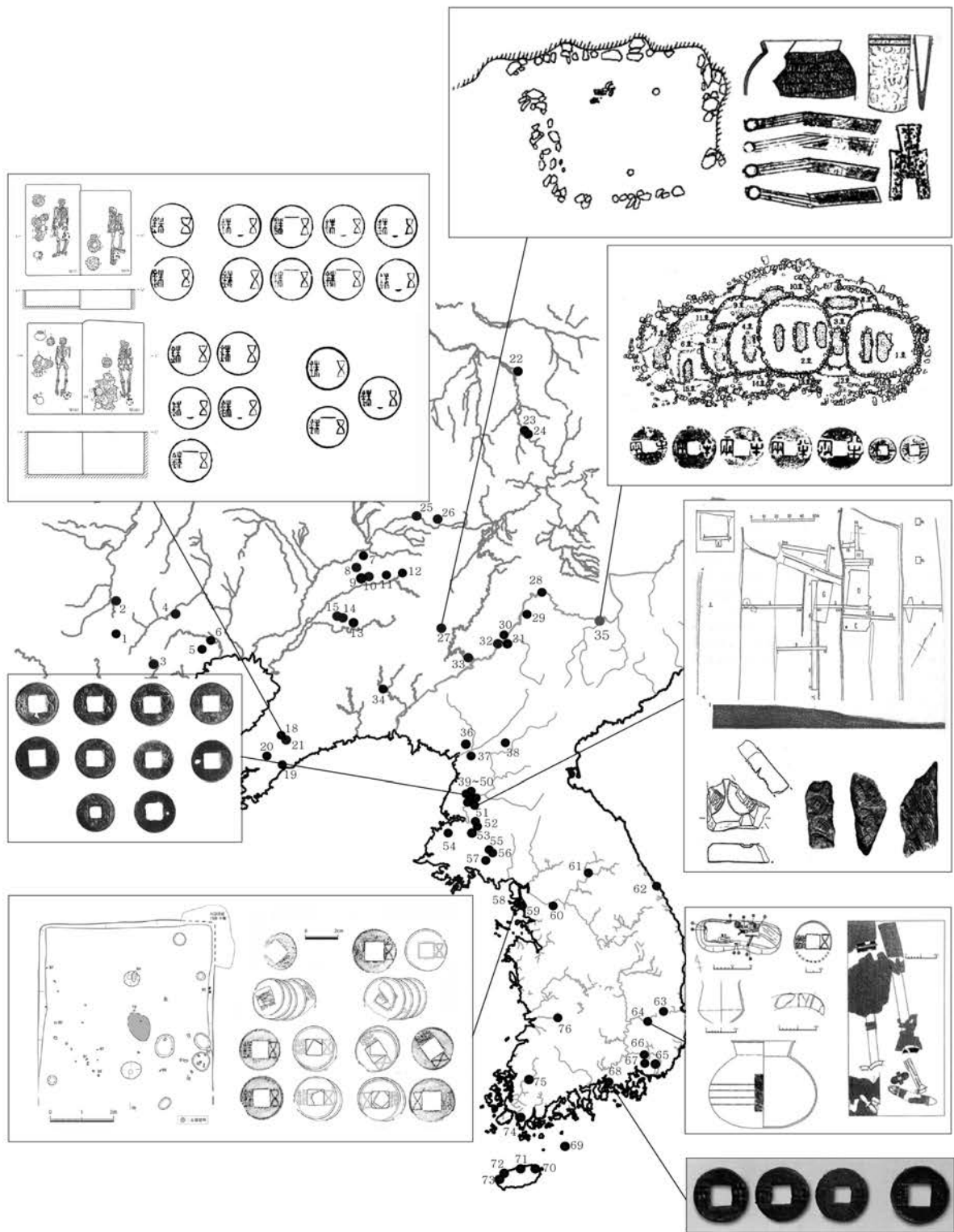


圖1. 아시아 貨幣 出土 遺蹟 分布

1. 凌源 凌鋼村 2. 建平縣 西胡素台村 3. 建平縣 后城子 4. 朝陽 袁台子 5. 錦州 英房子村 6. 錦州 國和街 7. 鐵嶺 邱家台
8. 沈陽 新城子鄉 9. 沈陽 上伯官 10. 撫順 劉剛屯村 11. 撫順 中央路 12. 撫順 蓮花堡 13. 遼陽 唐戶屯 14,15. 遼陽 三道壕 16. 旅順口區 魯家村 17. 旅順口區 牧羊城 18. 大連 後元台村 19. 金縣 高麗寨 20. 普蘭店 花仁山 21. 普蘭店 姜屯 22. 榆樹 老河深 23. 吉林 南城子 24. 吉林 帽兒山 25. 西豐 西岔溝 26. 遼源 彩嵐墓地 27. 大甸子 抽水洞
28. 慈江道 土城里 29. 慈江道 西海里 30. 集安縣 通溝 31. 時中郡 魯南里 32. 集安 麻線溝 33. 寬甸滿族自治縣 通江村
34. 鳳城縣 鳳山村 35. 長白縣 干溝子 36. 前川郡 仲岩洞 37. 博川郡 德成里 38. 安州郡 應岩里 39. 德川郡 青松勞動者區
40. 平壤 貞栢洞 41. 平壤 南貞里 42. 平壤 貞梧洞 43. 平壤 樂浪洞 44. 平壤 土城洞 45. 平壤 樂浪土城 46. 平壤 南寺里
47. 平壤 將進里 48. 平壤 道濟里 49. 平壤 石巖里 50. 平壤 勝利洞 51. 平壤 東山洞 52. 黃州 黑橋里 53. 鳳山郡 良洞里
54. 鳳山郡 智搭里 55. 殷栗郡 雲城里 56. 銀波郡 青龍里 57. 黃州郡 宜峯里 58. 仁川 雲北洞 59. 仁川 雲南洞 60. 風納 土城 61. 春川 新北 62. 江陵 草當洞 63. 永川 龍田里 64. 慶山 林堂 65. 金海 會峴里 66. 昌原 茶戶里 67. 昌原 城山
68. 四川 勒島 69. 麗水 巨文島 70. 濟州 終達里 71. 濟州 山地港 72. 濟州 錦成里 73. 傳 濟州島 74. 海南 郡谷里
75. 羅州 浪洞 76. 完州 上雲里

表 1. 半兩錢 鑄造關聯 記錄

年度	文獻	내용
惠文王 19 年 (BC 336)	『史記』「秦始皇本紀」	惠文王生十九年而立。立二年，初行錢
始皇帝 37 年 (BC 210)		始皇帝三十七年，復行錢
漢 高祖 ? (BC 206~195)	『史記』「平準書」	於是為秦錢重難用，更令民鑄錢
呂后 2 年 (BC 186)	『史記』卷二十二 「漢興以來將相名臣年表」	行八銖錢
	『漢書』「高后紀」	行八銖錢
呂后 6 年 (BC 182)		行五分錢
漢 文帝 5 年 (BC 175)	『史記』「平準書」	至孝文時，莢錢益多，輕，乃更鑄四銖錢，其文為「半兩」，令民縱得自鑄錢。故吳諸侯也，以即山鑄錢，富埒天子，其後卒以叛逆。鄧通，大夫也，以鑄錢財過王者。故吳，鄧氏錢布天下，而鑄錢之禁生焉。
武帝 建元 元年 (BC 140)	『漢書』「武帝紀」	行三銖錢
武帝 5 年 (BC 136)		五年春，罷三銖錢，行半兩錢
武帝 元狩 5 年 (BC 118 年)		罷半兩錢，行五銖錢。

III . 화폐의 출토양상과 용도

동북아시아에서 화폐가 출토된 유구별로 화폐의 용도를 추정해보면 먼저 墳墓에서 出土된 경우는 대부분 少量만 出土되었다는 특징이 있으며, 墳墓 築造過程에서의 祭儀行爲에 사용된 경우가 많다. 당시 사회에서는 화폐의 보유 수량이 적었으며, 獲得하기 어려웠기 때문에 威信財의 용도로서 사용되었을 것으로 판단된다.

매납유적³에서 출토된 경우는 크게 財貨의 貯藏을 위해 화폐를 매납한 ‘저장매납’, 戰亂이나 有事時에 財貨를 隱匿하기 위한 目的인 ‘퇴장매납’ (박선미 2009), 祭儀의 용도로 화폐를 매납한 ‘제의매납’ 으로 나눌 수 있다.

住居地에서의 화폐 출토는 당시 해당지역에서의 화폐사용 가능성을 높여주는 자료이다. 주거지에서 다량의 화폐가 출토되는 경우는 화폐가 실제로 사용되었을 가능성이 높는데, 노끈 등으로 꿰어진 경우가 많다는 점이 이를 입증한다.

城地에서의 출토사례 역시 주거지와 같이 화폐의 사용 가능성을 높여주는 자료이다. 하지만 성지의 경우 지배세력이 바뀌더라도 오랫동안 이용되는 경우가 많이 때문에 매납시기를 파악하는데 어려움이 있기 때문에 용도 파악에 다소 어려움이 존재한다.

³ 中國學界에서는 ‘窖藏遺蹟’, 韓國學界에서는 일반적으로 ‘退藏遺蹟’ 이라는 용어가 사용된다.

IV. 시기별 화폐의 용도변화

동북아시아에 화폐가 출토되기 始作하는 시점은 紀元前 3 世紀 前半으로 볼 수 있다. 戰國時代 貨幣과 秦漢代 圓錢⁴ 이 주를 이루며, 鴨綠江 以北地域 즉 중국동북지역과 압록강 유역까지의 공간에서만 출토된다는 특징을 보인다. 통일 진에 의해 반량전이 주조되는 紀元前 3 世紀末 부터 漢 初에 이르는 시기에는 統一 秦 半兩, 八銖半兩錢이 鑄造된다. 하지만 여전히 전국시대 화폐가 유통력을 가지고 있었으며, 앞 시기와 유사하게 出土範圍는 淸川江 以北地域으로 制限되고, 오히려 出土數量은 減少한 모습을 보인다. 또한 대릉하 유역의 凌源 凌鋼村, 압록강 유역의 大甸子 抽水洞 등 두 유적의 경우 무언가 긴박한 상황에 의해 형성된 유적으로 당시 전란과 같은 배경이 있었을 것으로 추정된다.

樂浪郡 設置로 대변되는 紀元前 2 世紀 代는 八銖半兩錢과 四銖半兩錢이 鑄造된 시기로 앞 시기와는 다른 상황이 확인된다. 출토유적의 수와 범위에서는 큰 차이를 보이지 않지만, 出土 數量이 增加한다. 특히 遼東半島의 姜屯漢墓⁵, 遼陽 三道壕 住居地⁶ 의 경우 貨幣를 積極的으로 使用 혹은 流通한 점이 확인된다. 또한 앞 시기의 경우 전국시대의 화폐가 공반하는 경우가 많았으나, 紀元前 2 世紀代 대부터는 이러한 양상이 눈에 띄게 줄어들었다는 점이 특징적이다. 사수반량이 단독으로 출토된 사례가 드물고 오히려 뒷 시기 화폐와 공반하는 사례가 많기 때문에, 사수반량이 처음 주조된 文·景帝, 武帝 代 初期까지는 화폐의 유입이 활발하게 이루어지지 않았을 가능성이 높다.

樂浪郡 設置 後에 해당하는 紀元前 1 世紀 代는 西漢 五銖錢이 鑄造된 시기이다. 한 군현 설치로 貨幣의 出土圈域이 北으로는 松花江流域, 南으로는 日本列島까지로 擴大된다. 鴨綠江 以南地域의 경우 墳墓에서 出土되는 경우가 大多數를 차지하는 가운데 仁川 雲北洞遺蹟⁷, 麗水 巨文島⁸ 와 같이 독특한 사례도 확인된다. 대부분 무덤의 副葬品이나 威信財의 用途로 少量만 유입되었을 가능성이 높다. 한편, 樂浪土城에서는 거푸집과 화폐가 출토되었으나, 이곳의 鑄錢과 貨幣使用에 관해서는 異見이 있다. 거푸집의 출토를 보았을 때는 화폐를 사용했을 가능성이 높다고 볼 수 있으나, 거푸집의 大部分이 傳 出土品이 많기 때문에 더 이상의 판단은 어렵다. 또한 鑄錢의 主體는 누구인지, 鑄錢을 했다면 출토수량이 왜 적은지 등에 대해서도 추가적인 검토가 필요하다.

紀元後 시기는 王莽 代의 王莽錢과 東漢 五銖錢이 鑄造되는 시기이다. 오히려 紀元前 1 世紀 代에 비해 일본을 제외한 지역에서 出土遺蹟의 範圍와 數量이 減少하며, 出土의 中心이 內陸地域에서 海岸地域으로 變化한다. 특히 王莽錢의 경우 單獨으로 出土된 사례보다 東漢 五銖錢과 함께 출토된 사례가 많다는 점, 日本列島 內 出土貨幣 가운데 王莽錢의 비율이 상당히 높은 점 등이 특징적이다. 전체적으로 보았을 때는 鴨綠江 以南 地域에서는 墳墓에서의 出土 사례가 急減한다. 이는 화폐가 副葬品, 威信財로서의 역할을 잃으면서 획득의 필요성을 느끼지 못했을 가능성, 화폐의 용도가 단순 위신재에서 다른 어떤 것으로 변화했을 가능성 등을 추정할 수 있다.

⁴ 臚四化, 臚六化, 一化錢 등이 해당되며, 중국 동북지역을 중심으로 戰國時代 末 ~ 秦漢初에 걸쳐 출 토된다. 정확한 鑄造地와 鑄造勢力, 鑄造時期 등에 대해서는 여전히 많은 異見이 있다.

⁵ 遼寧省文物考古研究所, 2013, 『姜屯漢墓』, 文物出版社.

⁶ 東北博物館, 1957, 「遼陽三道壕西漢村落遺址」, 『考古學報』 1 期 / 東北文物工作隊, 1955, 「東北文物工作隊一九五四年工作簡報」, 『文物參考資料』 3 期.

⁷ 한강문화재연구원, 2012, 『인천 운북동 유적』.

⁸ 池健吉, 1990, 「南海岸地方 漢代貨幣」, 『昌山金正基博士華甲祈念論叢』.

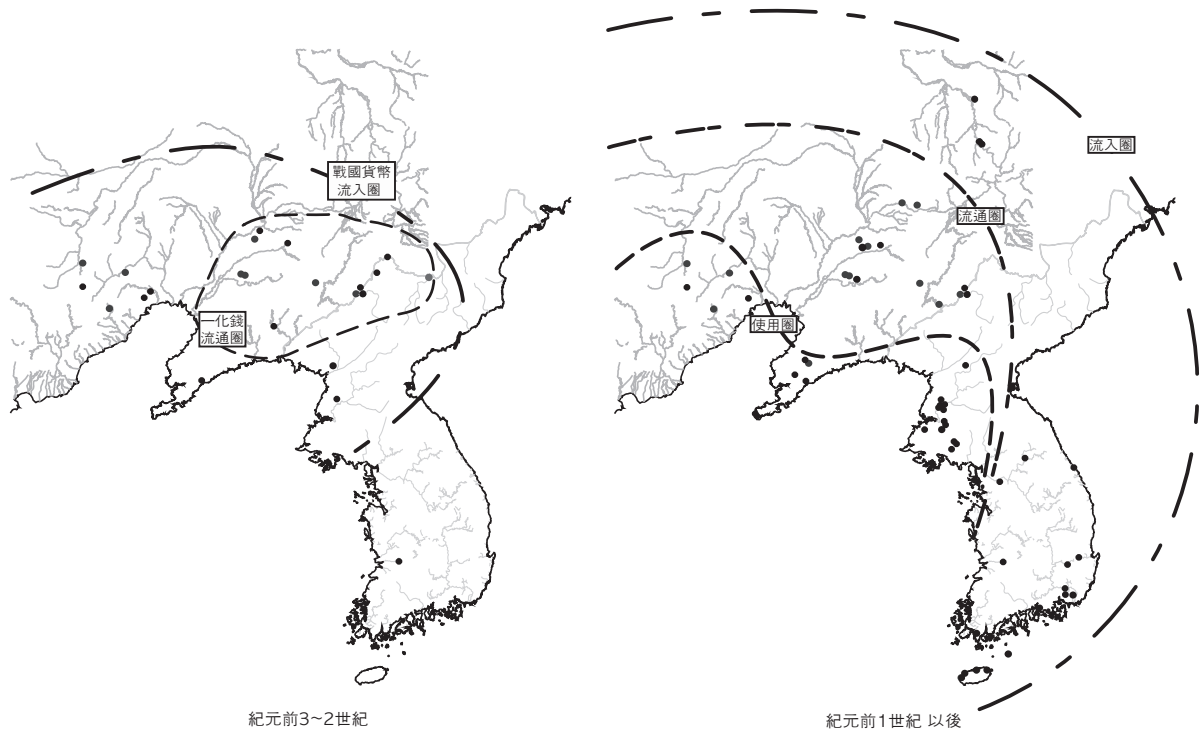


圖2. 貨幣의 用道에 따른 圈域變化

V. 맺음말

동북아시아에서 출토된 貨幣는 時期, 地域에 따라 각기 다른 용도로 사용되고 있는데, 이러한 변화에는 당시 복잡했던 政治的 상황이 作用했을 가능성이 높다. 당시 交易의 形態, 主體의 變化 등과도 밀접한 관련이 있었을 것으로 판단된다.

池健吉, 1990, 「南海岸地方 漢代貨幣」, 『昌山金正基博士華甲祈念論叢』.

韓國文化財保護財團, 1998, 『慶山 林堂遺蹟』.

정인성, 2000, 「낙랑토성 내에서의 청동기제작과 공방의 위치」, 『경북대학교 고고인류학과 20주년 기념논총』pp128~162.

東亞大學校博物館, 2003, 『發掘遺蹟과 遺物』.

이영훈 · 이양수, 2007, 「한반도 남부 출토 오수전에 대하여」, 『永川 龍田里 遺蹟』, pp168~169, 국립경주박물관.

박선미, 2009, 『고조선과 동북아의 고대화폐』, 학연문화사.

한강문화재연구원, 2012, 『인천 운북동 유적』.

권옥택, 2013, 「한반도 · 중국 동북지역 출토 秦 · 漢代 화폐의 전개와 용도」, 영남대학교 석사학위논문.

東北博物館, 1957, 「遼陽三道壕西漢村落遺址」, 『考古學報』 1期.

東北文物工作隊, 1955, 「東北文物工作隊一九五四年工作簡報」, 『文物參考資料』 3期.

中國社會科學院考古研究所, 1959, 『洛陽燒溝漢墓』, 科學出版社.

- 武家昌・王俊輝,2003,「辽宁桓仁县抽水洞遗址发掘」,『北方文物』2期.
- 吉林省文物考古研究所,2003,「吉林長白縣干溝子墓地發掘簡報」,『考古』8期.
- 遼寧省文物考古研究所,2013,『姜屯漢墓』,文物出版社.
- 關野貞 外,1927,『樂浪郡時代ノ遺蹟』,朝鮮總督府.
- 小泉顯夫 外,1934,『樂浪彩篋冢』,朝鮮古墳研究會.
- 古澤義久,2010,「中國東北地方・韓半島西北部における戰國・秦・漢初代の方孔圓錢の展開」,
『古文化談叢』第64集,九州古文化研究會.
- 宮澤知之,2011,「中國古代における錢貨統一の諸段階」,『古代における東西の錢と文字瓦』第1章
基調講演.

東北アジアの古代中国貨幣

(財) 嶺南文化財研究院 権旭宅

I. はじめに

東北アジアで出土した貨幣は青銅器時代の貝貨と石貨、戦国時代に鑄造されたものとして知られている刀幣と布幣、秦、漢の法定貨幣であった半両錢、五銖錢、王莽錢などがある。特に漢代貨幣は最近に入り出土数量が増加しているのみならず、鑄造と関連した文献記録と中国洛陽焼溝漢墓出土五銖錢分類¹などを通して遺構と共伴遺物の絶対年代を決定する資料として活用されている。

中原地域で鑄造、流通した貨幣の用途は当時の歴史、文化、経済などを記録した『秦律』、『史記』、『漢書』などで確認することができる。貨幣は商品経済を媒介し、小農民の存立を基盤とする専制国家の財政行政運用に必要な道具として活用されたものと推定される²。反面、韓半島南部では墳墓、住居址、貝塚、祭儀遺構など多様な遺構から出土し、当時韓半島南部での貨幣使用が中国・中原地域とは異なる事実を推定することができるようになった。

II. 貨幣の種類と出土遺跡

半両錢は『史記』「秦始皇本紀」と「平准書」に紀元前 336 年（恵文王 2 年）初めて鑄錢されたという記録が出ており、この時鑄造されたものが半両錢であると推定される。大きく、統一秦半両、八銖半両、四銖半両などにわけることができる。この後、紀元前 118 年漢武帝が五銖錢を発行する前まで使用される（表 1）。五銖錢は漢武帝が発行した郡国五銖錢を始まりとして 621 年開元通寶が鑄造される前まで約 700 年間使用された。王莽錢は王莽により断行された貨幣改革により鑄造された大泉、貨泉などを一まとめにした言葉で、短い期間発行されたが、鑄造量は多く、韓半島、日本などでも多くの数量確認される。

東北アジアで貨幣が出土する遺跡は中国東北地域の大凌河流域、遼河流域、遼東半島、松花江流域、鴨緑江流域をはじめ韓半島まで約 80 箇所到達する（図 1）。中国東北地域の場合、墳墓、住居址、城址などでの出土が主となる反面、韓半島の場合、墳墓出土品が大多数を占めているという差異点がある。

¹ 中国社会科学院考古研究所, 1959, 『洛陽焼溝漢墓』, 科学出版社.

² 宮澤知之, 2011, 「中国古代における錢貨統一の諸段階」, 『古代における東西の錢と文字瓦』 第 1 章 基調講演.

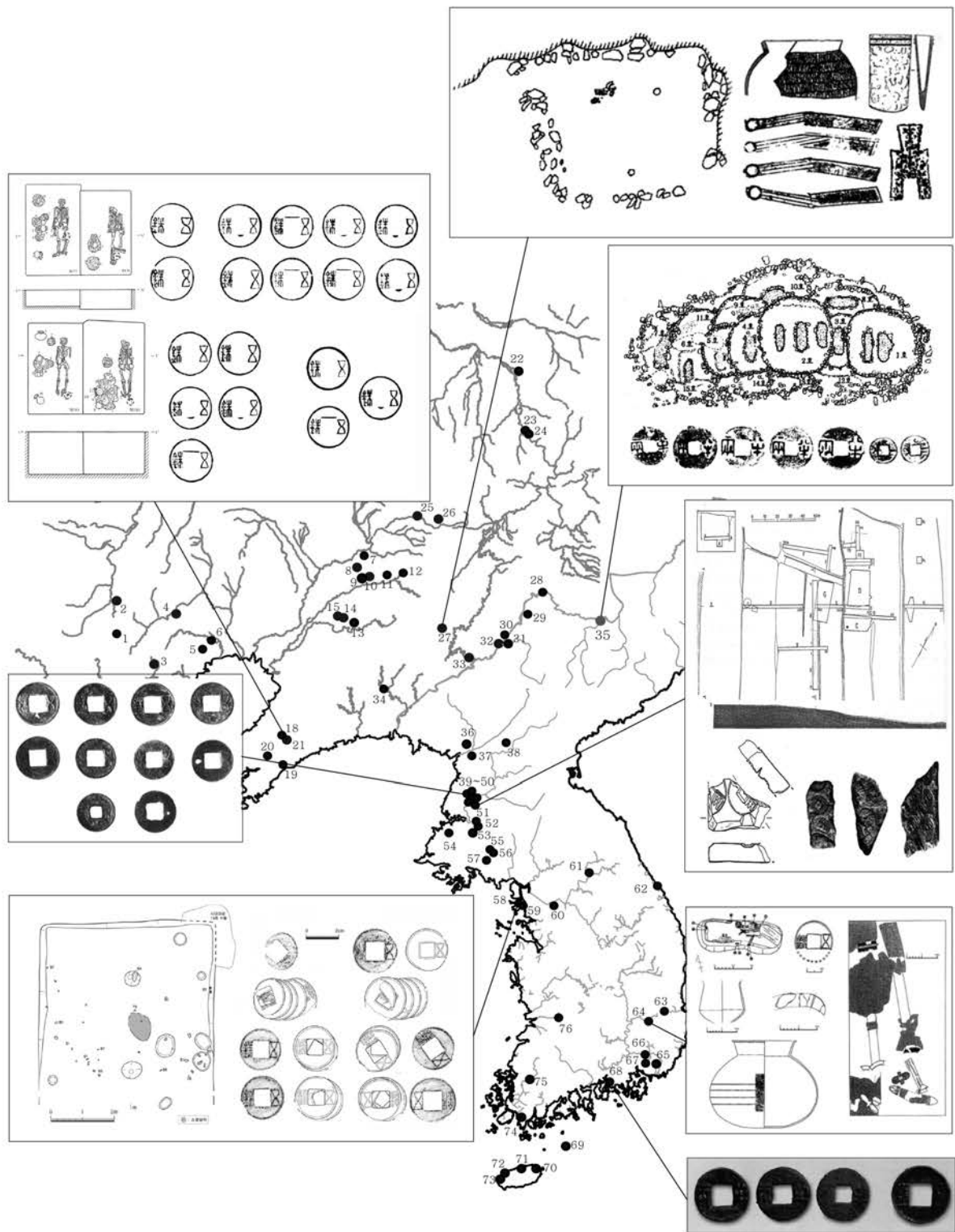


図1. アジア貨幣出土遺跡分布

1. 凌源 凌鋼村 2. 建平縣 西胡素台村 3. 建平縣 后城子 4. 朝陽 袁台子 5. 錦州 英房子村 6. 錦州 國和街 7. 鐵嶺 邱家台
8. 沈陽 新城子鄉 9. 沈陽 上伯官 10. 撫順 劉雨屯村 11. 撫順 中央路 12. 撫順 蓮花堡 13. 遼陽 唐戶屯 14,15. 遼陽 三道壕 16. 旅順口區 魯家村 17. 旅順口區 牧羊城 18. 大連 後元台村 19. 金縣 高麗寨 20. 普蘭店 花仁山 21. 普蘭店 姜屯 22. 榆樹 老河深 23. 吉林 南城子 24. 吉林 帽兒山 25. 西豐 西岔溝 26. 遼源 彩嵐墓地 27. 大甸子 抽水洞
28. 慈江道 土城里 29. 慈江道 西海里 30. 集安縣 通溝 31. 時中郡 魯南里 32. 集安 麻線溝 33. 寬甸滿族自治縣 通江村
34. 鳳城縣 鳳山村 35. 長白縣 干溝子 36. 前川郡 仲岩洞 37. 博川郡 德成里 38. 安州郡 應岩里 39. 德川郡 青松勞動者區
40. 平壤 貞栢洞 41. 平壤 南貞里 42. 平壤 貞梧洞 43. 平壤 樂浪洞 44. 平壤 土城洞 45. 平壤 樂浪土城 46. 平壤 南寺里
47. 平壤 將進里 48. 平壤 道濟里 49. 平壤 石巖里 50. 平壤 勝利洞 51. 平壤 東山洞 52. 黃州 黑橋里 53. 鳳山郡 良洞里
54. 鳳山郡 智搭里 55. 殷栗郡 雲城里 56. 銀波郡 青龍里 57. 黃州郡 宜峯里 58. 仁川 雲北洞 59. 仁川 雲南洞 60. 風納 土城
61. 春川 新北 62. 江陵 草當洞 63. 永川 龍田里 64. 慶山 林堂 65. 金海 會峴里 66. 昌原 茶戶里 67. 昌原 城山
68. 四川 勒島 69. 麗水 巨文島 70. 濟州 終達里 71. 濟州 山地港 72. 濟州 錦成里 73. 傳 濟州島 74. 海南 郡谷里
75. 羅州 浪洞 76. 完州 上雲里

表1. 半兩錢鑄造関連記録

年度	文献	内容
惠文王 19年 (BC 336)	『史記』「秦始皇本紀」	惠文王生十九年而立。立二年，初行錢
始皇帝 37年 (BC 210)		始皇帝三十七年，復行錢
漢 高祖？ (BC 206~195)	『史記』「平準書」	於是為秦錢重難用，更令民鑄錢
呂后 2年 (BC 186)	『史記』卷二十二 「漢興以來將相名臣年表」	行八銖錢
	『漢書』「高后紀」	行八銖錢
呂后 6年 (BC 182)		行五分錢
漢 文帝 5年 (BC 175)	『史記』「平準書」	至孝文時，莢錢益多，輕，乃更鑄四銖錢，其文為「半兩」，令民縱得自鑄錢。故吳諸侯也，以即山鑄錢，富埒天子，其後卒以叛逆。鄧通，大夫也，以鑄錢財過王者。故吳，鄧氏錢布天下，而鑄錢之禁生焉。
武帝 建元 元年 (BC 140)	『漢書』「武帝紀」	行三銖錢
武帝 5年 (BC 136)		五年春，罷三銖錢，行半兩錢
武帝 元狩 5年 (BC 118 年)		罷半兩錢，行五銖錢。

Ⅲ. 貨幣の出土様相と用途

東北アジアで貨幣が出土する遺構別に貨幣の用途を推定すると、まず墳墓で出土する場合は大部分少量のみ出土するという特徴があり、墳墓築造過程での祭儀行為に使用された場合が多い。当時の社会では貨幣の保有数量が少なく、獲得が難しかったために威信財の用途として使用されたものと判断される。

埋納遺跡³で出土する場合は大きく、財貨の貯蔵のため貨幣を埋納した‘貯蔵埋納’、戦乱や有事の際に財貨を隠匿する目的の‘退蔵埋納’（朴善美 2009）、祭儀の用途で貨幣を埋納した‘祭儀埋納’にわけることができる。

住居址での貨幣出土は当時の該当地域での貨幣使用可能性を高めてくれる資料である。住居址で多量の貨幣が出土する場合は貨幣が実際に使用された可能性が高く、紐などで通した場合が多いという点がこれを立証する。

城址での出土事例もやはり住居址と同様に貨幣の使用可能性を高めてくれる資料である。しかし、城址の場合、支配勢力が変わっても長い期間利用された場合が多いため、埋納時期を把握する上で難しさがあり、用途把握に多少の困難が存在する。

³ 中国学界では‘窖藏遺跡’、韓国学界では一般的に‘退蔵遺跡’という用語が使用される。

IV. 時期別貨幣の用途変化

東北アジアに貨幣が出土しはじめる時点は紀元前3世紀前半とみることができる。戦国時代の貨幣と秦漢代の円銭⁴が主となり、鴨緑江以北地域、即ち中国東北地域と鴨緑江流域までの空間でのみ出土するという特徴をみせる。統一秦により半両銭が鑄造される紀元前3世紀末から漢初にいたる時期には統一秦半両、八銖半両銭が鑄造される。しかし、依然戦国時代の貨幣が流通力を持っており、前の時期と同様に出土範囲は鴨緑江以北地域に制限され、むしろ出土数量は減少した様相を呈する。また、大凌河流域の凌源凌鋼村、鴨緑江流域の大甸子抽水洞などの遺跡の場合、何らかの緊迫した状況により形成された遺跡として当時戦乱のような背景があったことを推定させる。

楽浪郡設置に代表される紀元前2世紀代は八銖半両銭と四銖半両銭が鑄造される時期で前の時期とは異なる状況が確認される。出土遺跡の数と範囲では大きな差異がみられないが、出土数量は増加する。特に遼東半島の姜屯漢墓⁵、遼陽三道壕集落⁶の場合、貨幣を積極的に使用または流通した点が確認される。また、前時期の場合、戦国時代の貨幣が共伴するケースが多いが、紀元前2世紀代からはこのような様相が目立つほど減少するという点が特徴的である。四銖半両が単独で出土する事例が稀で、むしろ後の時期の貨幣と共伴する事例が多いため、四銖半両が初めて鑄造された文・景帝、武帝代初期までは貨幣の流入が活発になされなかった可能性が高い。

楽浪郡設置後に該当する紀元前1世紀代は前漢五銖銭が鑄造される時期である。漢郡県設置を契機に貨幣の出土圏域が北では松花江流域、南では日本列島までに拡大する。鴨緑江以南地域の場合、墳墓で出土するケースが大多数を占めている中、仁川雲北洞遺跡⁷、麗水巨文島⁸のような独特な事例も確認される。大部分、墓地の副葬品や威信財の用途で少量のみ流入した可能性が高い。一方、楽浪土城では鑄型と貨幣が出土したが、ここでの鑄銭と貨幣使用に関しては異論がある。鑄型の出土があった場合は、貨幣を使用した可能性が高いものとみることができるが、鑄型の大部分が伝出土品が多いためそれ以上の判断は難しい。また鑄銭の主体が誰であるのか、鑄銭を行ったとすれば、出土数量がなぜ少ないのかなどについても追って検討が必要となる。

紀元後の時期は王莽代の王莽銭と後漢五銖銭が鑄造される時期である。むしろ紀元前1世紀代に比べ、日本を除外した地域で出土遺跡の範囲と数量が減少するが、出土の中心が内陸地域から海岸地域へと変化する。特に王莽銭の場合、単独で出土した事例より後漢五銖銭とともに出土した事例が多い点、日本列島内出土貨幣の中で王莽銭の比率が相当に高い点などが特徴的である。全体的にみたときは鴨緑江以南地域では墳墓での出土事例が急減する。これは貨幣が副葬品、威信財としての役割を失い、獲得の必要性を感じなくなった可能性、貨幣の用途が単純な威信財から異なる何らかのものに変化した可能性などを推定することができる。

⁴ 臚四化、臚六化、一化銭などが該当し、中国東北地域を中心に戦国時代末～秦漢初にかけて出土する。正確な鑄造地と鑄造勢力、鑄造時期については依然多くの異論がある。

⁵ 遼寧省文物考古研究所，2013、『姜屯漢墓』，文物出版社。

⁶ 東北博物館，1957，「遼陽三道壕西漢村落遺址」、『考古学報』1期 / 東北文物工作隊，1955，「東北文物工作隊一九五四年工作簡報」、『文物参考資料』3期。

⁷ 한강문화재연구원，2012，『인천 운북동 유적』。

⁸ 池健吉，1990，「南海岸地方 漢代貨幣」、『昌山金正基博士華甲記念論叢』。

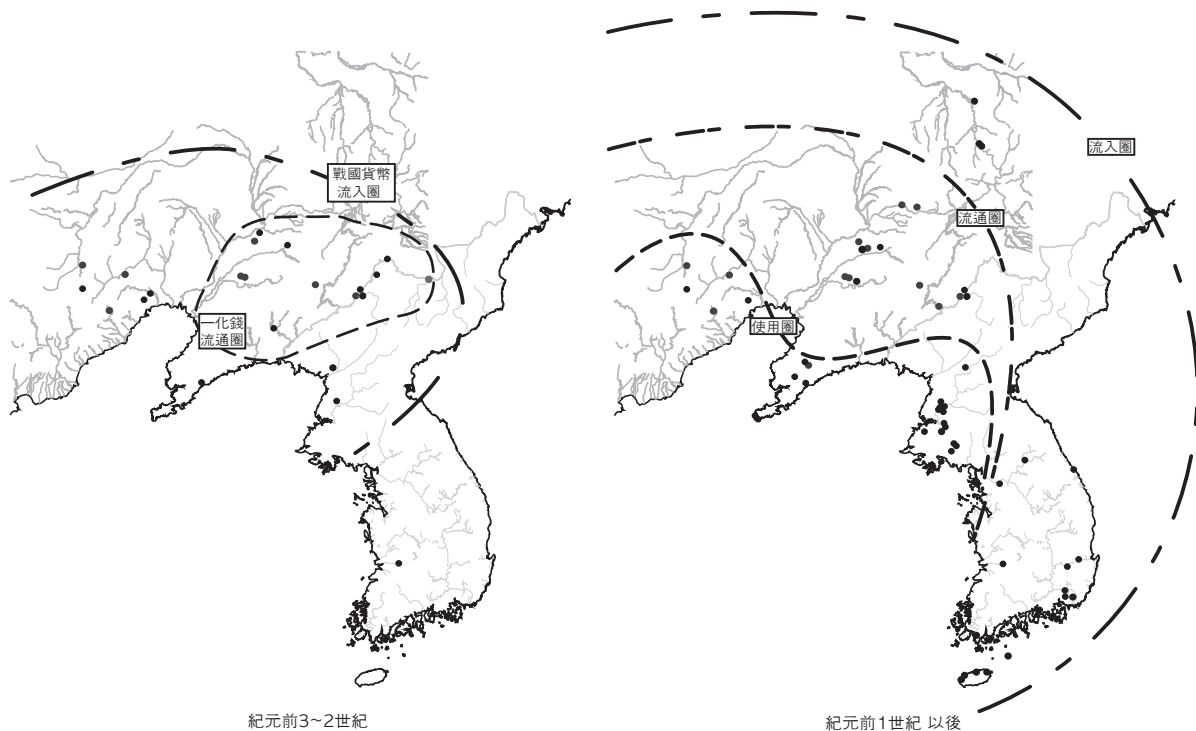


図2. 貨幣の用途による圏域変化

V. おわりに

東北アジアで出土した貨幣は時期、地域によって各期で異なる用途で使用されているが、このような変化には当時の複雑な政治的状況が作用した可能性が高い。当時の交易の形態、主体の変化などとも密接な関連があったものと判断される。

池健吉, 1990, 「南海岸地方 漢代貨幣」, 『昌山金正基博士華甲記念論叢』.

韓國文化財保護財團, 1998, 『慶山 林堂遺蹟』.

정인성, 2000, 「낙랑토성 내에서의 청동기제작과 공방의 위치」, 『경북대학교 고고인류학과 20주년 기념논총』pp128~162.

東亞大學校博物館, 2003, 『發掘遺蹟과 遺物』.

이영훈 · 이양수, 2007, 「한반도 남부 출토 오수전에 대하여」, 『永川 龍田里 遺蹟』, pp168~169, 국립경주박물관.

박선미, 2009, 『고조선과 동북아의 고대화폐』, 학연문화사.

한강문화재연구원, 2012, 『인천 운북동 유적』.

권옥택, 2013, 「한반도 · 중국 동북지역 출토 秦 · 漢代 화폐의 전개와 용도」, 영남대학교 석사학위논문.

東北博物館, 1957, 「遼陽三道壕西漢村落遺址」, 『考古學報』 1期.

東北文物工作隊, 1955, 「東北文物工作隊一九五四年工作簡報」, 『文物參考資料』 3期.

中國社會科學院考古研究所, 1959, 『洛陽燒溝漢墓』, 科學出版社.

- 武家昌・王俊輝, 2003, 「辽宁桓仁县抽水洞遗址发掘」, 『北方文物』 2期.
- 吉林省文物考古研究所, 2003, 「吉林長白縣干溝子墓地發掘簡報」, 『考古』 8期.
- 遼寧省文物考古研究所, 2013, 『姜屯漢墓』, 文物出版社.
- 關野貞 外, 1927, 『樂浪郡時代ノ遺蹟』, 朝鮮總督府.
- 小泉顯夫 外, 1934, 『樂浪彩篋冢』, 朝鮮古墳研究會.
- 古澤義久, 2010, 「中國東北地方・韓半島西北部における戰國・秦・漢初代の方孔圓錢の展開」, 『古文化談叢』 第 64 集, 九州古文化研究會.
- 宮澤知之, 2011, 「中國古代における錢貨統一の諸段階」, 『古代における東西の錢と文字瓦』 第 1 章 基調講演.

(翻譯：長崎県埋藏文化財センター 古澤義久)

弥生時代中国貨幣の機能・用途

福岡大学 武末 純一

I はじめに

私は弥生時代に文字が使われ、中国の銭貨が交易の代価として機能した可能性を考えている。その時期は弥生時代後半期（中期後半～後期）が中心で、この時期の北部九州では、それまで対等だったツクシ政権内部の国々の関係が変化し、伊都国と奴国が台頭して他の国々の上に立つとともに、王が現れる。しかし、国や国々の内部は一律ではなく、半独立的な海村世界では、交易での文字・中国銭貨の使用が考えられる。

II 2000年代までの弥生時代後半期研究の到達点

(1) 墓

- 首長層墓の副葬品は、前漢鏡やガラス璧などの中国系が主流になる。後期には後漢に引き継がれる。
- 漢王朝から認められた王（キミ）の存在の証拠は、福岡市志賀島発見の「漢委奴國王」金印である。
- 三雲・井原遺跡南小路1号甕棺墓の金銅製四葉座金具は木棺を装飾した飾金具で、東夷の王の証。東西32m×南北31mの正方形に近い墓域が溝に囲まれた墳丘墓（特定個人墓）。

(2) 集落構造

- 後半期には吉野ヶ里遺跡など国邑が巨大化する。
- 一部の人々の方形区画（環溝）が、A類型（円形の中の方形）→B類型（円形の外の方形）→C類型（円形のない方形）と展開する（三雲・井原遺跡下西地区、福岡市野方中原遺跡、佐賀県千塔山遺跡）。
- 方形環溝は、物見櫓・高床倉庫群・広場など、集落のさまざまな重要施設を中に取り込む。

III 文字の使用と中国銭貨

(1) 海村の存在

- 農村とは異なり、漁業と海上交易活動を主体とする海村が弥生時代には存在した。福岡県御床松原遺跡での漁具の卓越と、佐賀県安永田遺跡の石庖丁との数量の違いから設定できる。御床松原と安永田の石庖丁の比率は住居跡1軒あたり約1：5である。
- これらの海村は原の辻遺跡を除いて国邑よりもはるかに小さいが、農村であまり出ない特殊な遺物〔楽浪系や三韓系の土器、中国銭貨〕が日常生活領域から出る。
- 韓国の勒島遺跡も漁具の卓越からみて無文土器時代末から原三国時代の典型的な海村である。

(2) 楽浪系土器

- 楽浪土器は、筒坏、洗、大鉢、花盆形土器など独特の器形がある。高速回転仕上げ、精良な胎土、糸で底部を切り離す技法、内面の同心弧の当具痕跡などが特色である。三韓瓦質土器は、無文土器から続く器形が多く、内面の当具は同心円だが、ほとんど消し、糸切りは無い。
- 楽浪土器は1遺跡1～2点程度の対馬型、3点以上だが遺跡全体に散漫に分布する原の辻型、遺跡内の一区画に集中する三雲番上型の三つに分かれる。対馬を除き墓には副葬されない。
- 日常生活遺跡から出る炊事用の滑石混入土器は、楽浪人の存在を示唆する。
- 弥生時代後半期には、対馬と韓半島南岸の日常的な交流が基層にあり、その上には日韓両地域の海村世界独自の交易活動が展開し、さらに最上部にはツクシ政権の首長層と中国本土の王朝や楽浪・帯方郡あるいは諸韓国との外交交渉が位置する三層構造が形成される。

(3) 文字使用の可能性—茶戸里遺跡1号墓—

- 弥生時代研究では、中国王朝との外交関係での文字の使用が想定されてきた。
- いっぽう、李健茂氏は、海村と内陸副葬地帯の接点である韓国茶戸里1号墓の筆、書刀、五銖銭、砵碼（両皿天秤の錘＝天秤権）から交易の場での文字使用を推定した。
この茶戸里1号墓からは、北部九州と関係が深い中細形銅矛c類が共伴し、遺跡からは同時期の弥生土器も出て、日本列島との交易にも文字を使用した可能性を提起する。

(4) 日本列島の天秤権・棹秤権と石硯・研石

- その後、弥生時代では石硯と研石の破片が島根県田和山遺跡で出土した。時期は中期後半。
- 棹秤権は原の辻遺跡（青銅製）・鳥取県青谷上寺地遺跡（石製）・福岡市那珂遺跡（石製）・京都府古殿遺跡（土製）で知られ、天秤権は大阪府亀井遺跡（石製）で2組10点が知られた。

(5) 中国銭貨使用の可能性

- 弥生時代の中国銭貨は、半両銭、五銖銭、貨泉、貨布、大泉五十などがある。近畿地域から韓半島の経路上にある海村で日常生活域から複数出る（原の辻16点、御床松原6点、元岡9点、今宿五郎江5点、鳥取県青谷上寺地4点、岡山県高塚遺跡25点、大阪府亀井遺跡4点、山口県沖ノ山遺跡116点以上など）場合と、内陸部にかけての墳墓の副葬品や日常生活域で少数出る場合がある。注目されるのは、同じ中国製品で首長層の副葬用器物となった完形中国鏡が、海村では原の辻遺跡を除くと、全く出ないのとは対照的に、完形中国鏡を多数保有した須玖遺跡や三雲遺跡、あるいはほかの巨大農村では中国銭貨がほとんど出ない（三雲遺跡0点、須玖遺跡1点、吉野ヶ里遺跡1点、平塚川添遺跡1点）ことである。
- この傾向は韓半島も同じで、勸島では半両銭・五銖銭が合計5点出土した。仁川市雲北洞遺跡5地点2号住居跡では五銖銭18点が紐に通した状態で発掘され、全羅南道の巨文島では五銖銭980点が採集された。
- 日韓の海村のつながりは農村とは別個の世界を形成し、その中で中国銭貨が流通・使用されたと見られる。つまり、海村は相互のネットワークで独自の世界をつくり、国邑からコントロールされるだけでなく、中国銭貨を用いた交易で国邑をコントロールする面もあった。
- ここで注目されるのは、海村の中国銭貨が日常生活領域から出て、墓からは出ない点である。楽浪土器も対馬での事例を除くと墓からは出ない。交易世界での楽浪人を主体とした文字と中国銭貨の使用が提起される。ただし、海村の弥生人もそうした文字使用と中国銭貨の使用に無縁ではなく、適応したとみられる。

IV 中国銭貨使用否定論に対して

- 海村世界での交易の対価としての中国銭貨の使用を否定する論は、青銅器原料説と祭祀使用説に分かれる。青銅器原料説は、大々的な青銅器製造遺跡での中国銭貨未出土から可能性は低い。
- 祭祀使用説は日本列島での貨泉の卓越の意味も問いかけるが、確たる解答はまだない。
日本列島の中国銭貨の日常生活域での確実な祭祀埋納例はほとんどない。沖ノ山例は運搬途中の沈没船の可能性もある。貨泉は後期前半には日本列島にかなり流入している（岡山市高塚出土例など）。
- 前漢の五銖銭と、新・後漢以降の貨泉とは一度切り離して考えたい。そうすれば、雲北里の五銖銭の緡や西島里の大量出土は決して例外とは言えない。この時期の文字使用は、石硯と筆がそろう。
- 近年、中世の銭貨流通の研究では、個別発見貨（Single-Find）と呼ばれる出土銭（偶然に遺失し、遺跡から遺構に伴わずに発見される銭貨）が注目され、流通の度合いを、もっとも盛んなレベルⅠ、一定量流通するが限定的なレベルⅡ、ほとんど流通しないレベルⅢの地域に分ける。

V おわりに

【引用・参考文献】

〈日文〉

- 岡山県教育委員会 2000『高塚遺跡・三手遺跡2』岡山県文化財発掘調査報告 150
- 小田富士雄 1982「山口県沖ノ山発見の漢代銅銭内蔵土器」『古文化談叢』第9集
- 古賀信幸・豆谷和之 1995「山口県宇部市沖ノ山発見の銭貨資料」『出土銭貨』第3号
- 志摩町教育委員会 1983『御床松原遺跡』（志摩町文化財調査報告書第3集）
- 志摩町教育委員会 1987『新町遺跡』（志摩町文化財調査報告書第7集）
- 志摩町教育委員会 1988『新町遺跡Ⅱ』（志摩町文化財調査報告書第8集）
- 第19回国民文化祭前原市実行委員会ほか 2004『シンポジウム 邪馬台国の時代「伊都国」』
- 武末純一 1989「山のムラ、海のムラ」『古代史復元4—弥生農村の誕生—』（講談社）
- 武末純一 1994「弥生中期の人々と文字」『西日本文化』300号
- 武末純一 2002『弥生の村』日本史リブレット3（山川出版社）
- 武末純一 2007「海を渡る弥生人」『第8回弥生文化シンポジウム 海と弥生人』（鳥取県教育委員会）
- 武末純一 2008「茶戸里遺跡と日本」『昌原茶戸里遺跡の発掘成果と課題』（昌原茶戸里遺跡発掘20周年国際学術シンポジウム）国立中央博物館
- 武末純一 2009「三韓と倭の交流—海村の視点から—」『国立歴史民俗博物館研究報告』第151集
- 武末純一 2013「弥生時代の権—青谷上寺地遺跡例を中心に—」『福岡大学考古学論集』2
- 武末純一 2015「3世紀の列島内外の交流とツクシ」『大集結 弥生時代のクニグニ』（青垣出版）
- 辻川哲朗 2015「丹後・古殿遺跡出土「鐸型土製品」の再検討」『同志社大学考古学シリーズ XI 森浩一先生に学ぶ 森浩一先生追悼論集』
- 長崎県教育委員会 2005『原の辻遺跡 総集編Ⅰ』（原の辻遺跡調査事務所調査報告書第30集）
- 福岡県教育委員会 1985c『三雲遺蹟 南小路地区編』（福岡県文化財調査報告書第69集）
- 福岡市教育委員会 2014『比恵66—比恵遺跡群第125次調査の報告—』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第1237集）
- 町田章 1998「三雲遺跡の金銅四葉座金具について」『アジア遊学』107 勉誠出版
- 松江市教育委員会・（財）松江市教育文化振興事業団 2005『田和山遺跡群発掘調査報告1 田和山遺跡』（松江市文化財調査報告書第99集）
- 三宅俊彦 2008「金代・北東アジアの銭貨流通」『古文化談叢』第20集（上）
- 森本幹彦 2008「福岡市西区今宿五郎江・大塚遺跡」『嶺南考古学会・九州考古学会第8回合同考古学会 日韓交流の考古学』
- 森本晋 2012「弥生時代の分銅」『考古学研究』第59巻3号（通巻235号）
- 〈韓文〉
- 金京七 2007「南韓出土漢代金属貨幣とその性格」『湖南考古学報』第27輯
- 国立慶州博物館 2007『永川龍田里遺蹟』（国立慶州博物館学術調査報告第19冊）
- 国立中央博物館 2012『昌原茶戸里』（国立中央博物館古蹟調査報告第41冊）
- 李健茂 1992「茶戸里出土の筆について」『考古学誌』第4輯（韓国考古美術研究所）
- 李昌熙 2007「靑島住居址の一断面」『第17回考古学国際交流研究会 韓国の最新発掘調査報告会』（財）大阪文化財センター）
- 李東注 2004「四川靑島C地区の調査成果」『嶺南考古学20年の歩み』（嶺南考古学会第13回定期学術発表会）
- 池健吉 1990「南海岸地方漢代貨幣」『昌山金正基博士華甲記念論叢』
- 漢江文化財研究院 2010『仁川雲北洞遺蹟 調査概要』

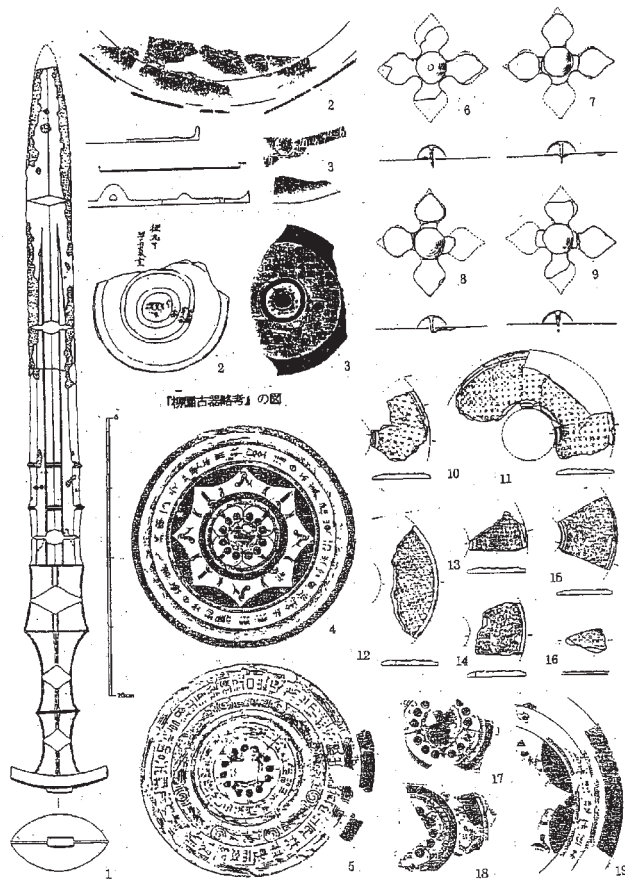
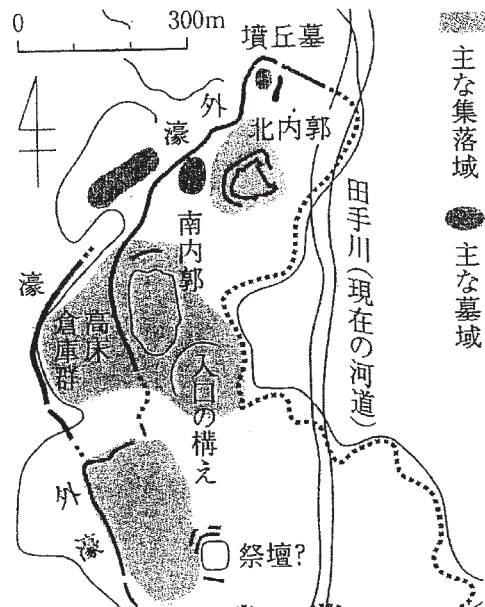
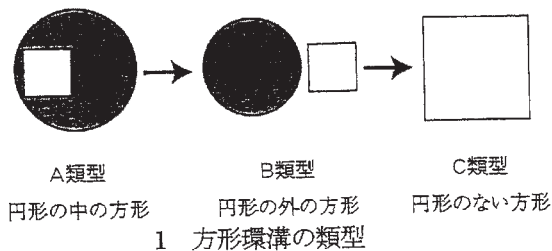


図1 三雲南小路王墓(1号墓)の副葬品



2 吉野ヶ里遺跡(弥生後期)

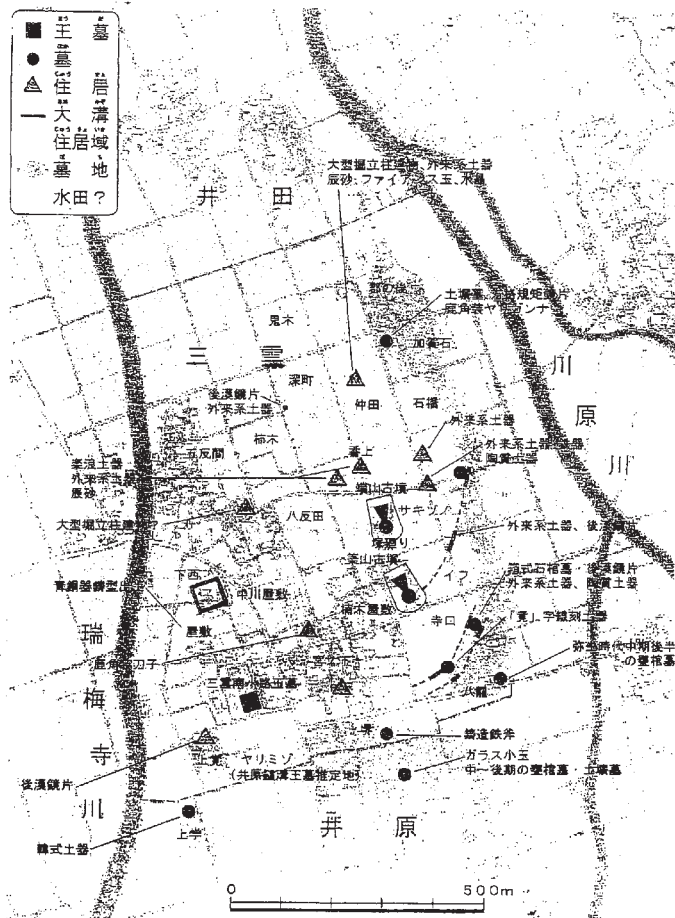


図2 三雲・井原遺跡の王墓と方形環溝

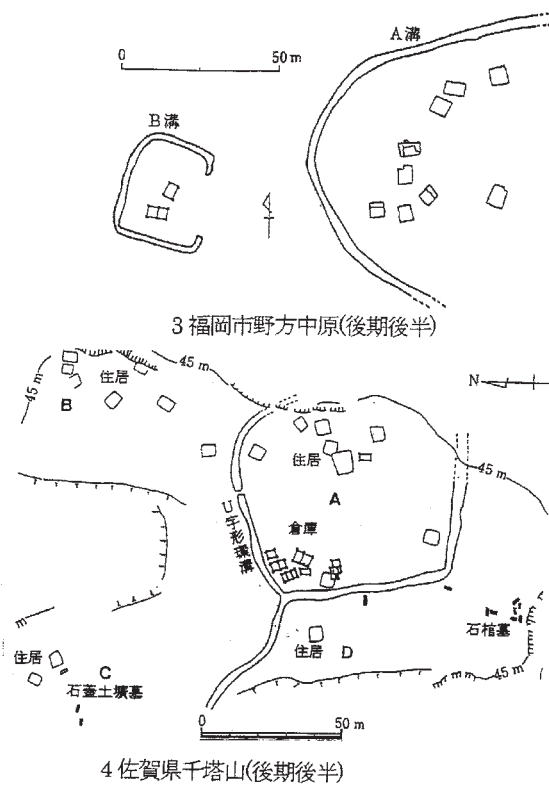


図3 弥生時代の方形環溝

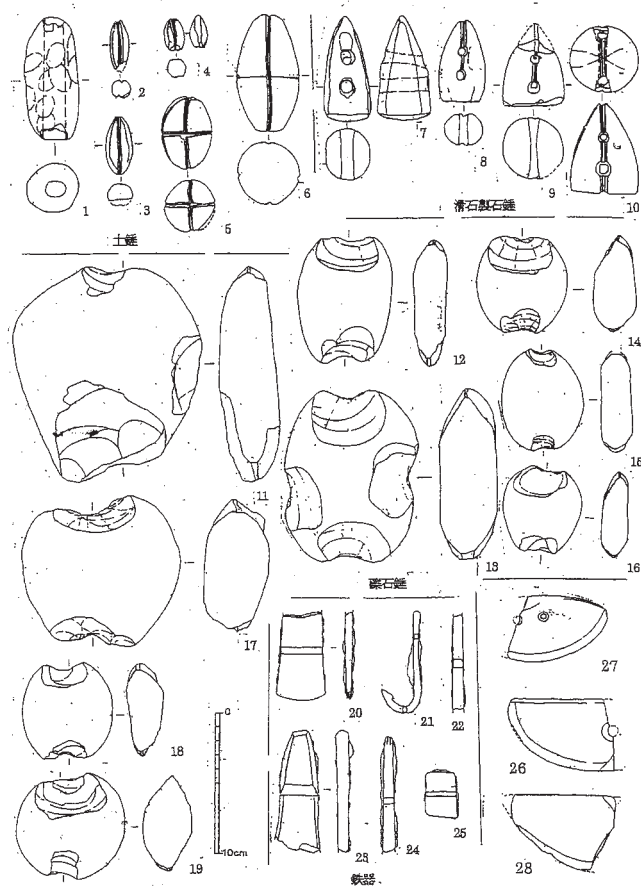


図4 御床松原遺跡の漁具・鉄器(1~25)と石庖丁(26~29)

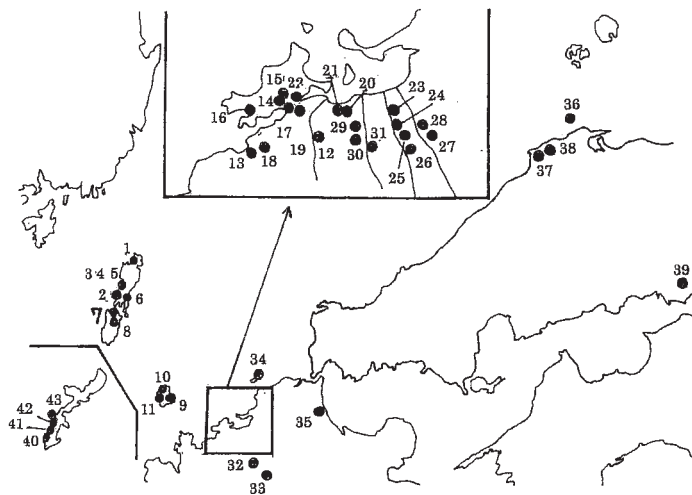


図6 日本列島の楽浪系土器分布図

1 経隈、2 木坂、3 三根、4 大田原ヤマト、5 瀬のさえ、6 観音鼻、7 小式崎、8 白蓮江浦、
 9 原の辻、10 カラカミ、11 戸田、12 三雲、13 深江井牟田、14 一の町、15 ウスイ、
 16 御床松原、17 潤地崎給、18 石崎曲り田、19 浦志井尻、20 今宿五郎江、21 大塚、
 22 元岡・桑原、23 博多、24 比恵、25 那珂、26 高畑、27 下月隈C、28 雀居、29 東入部、
 30 コノリ、31 吉武、32 立明寺、33 ヘボノ木、34 ろくどん、35 十双、36 鹿島海揚り、
 37 山持、38 青木、39 門前池、40 嘉門貝塚、41 荒地原、42 大久保原、43 中川原貝塚

弥生土器							古式土器
前期	中期			後期			
板付Ⅱ式	城ノ越式	須玖Ⅰ式	須玖Ⅱ式	高三磯式	下大隈式	西新式	宮の前式
水石里式		勸島式	古	中	新	古式新羅加耶土器 古式百濟土器	
後期			前期	後期		三国土器	
無文土器			三韓土器				

韓半島南部

図5 弥生時代後半期の併行関係

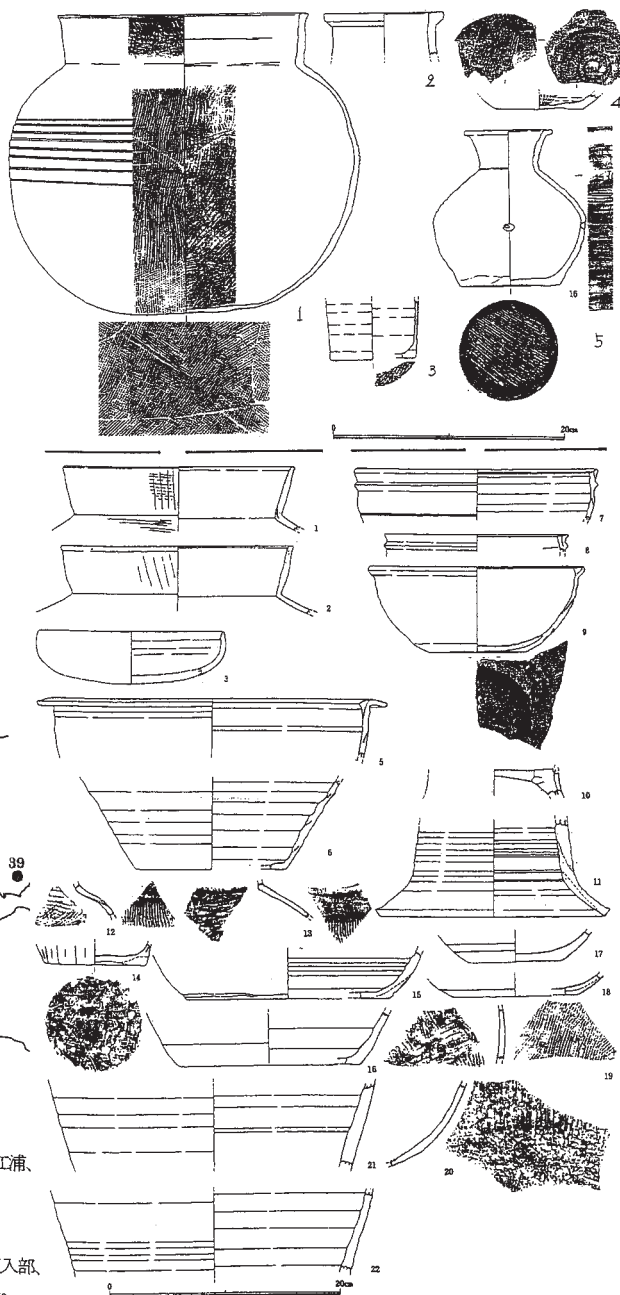


図7 北部九州の楽浪系土器 上：原の辻・カラカミ
 下：1~20 三雲番上 21・22 御床松原

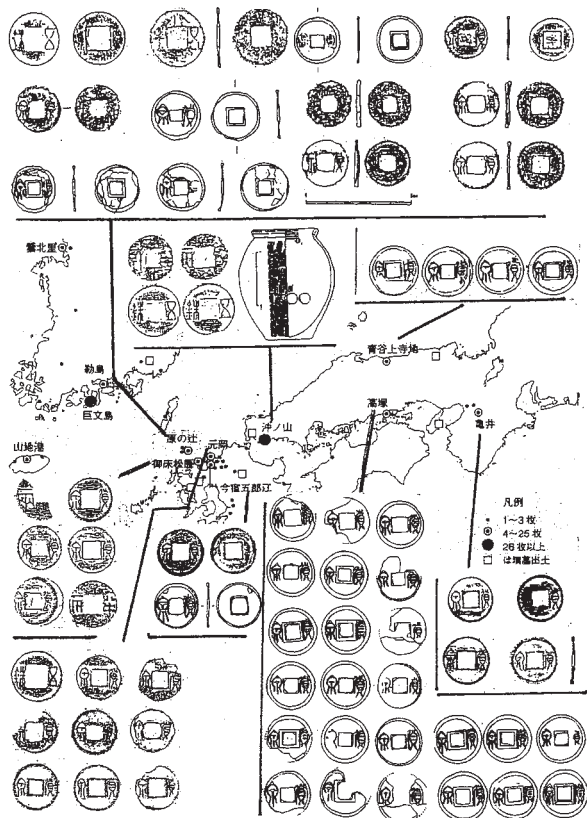
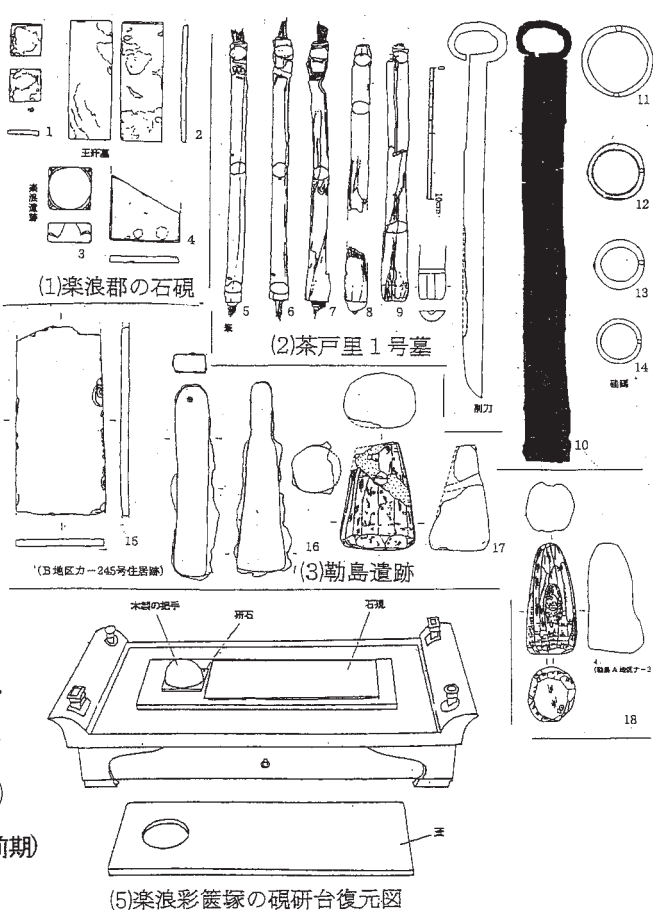


図8 日本列島の中国銭貨(弥生時代後半期～古墳時代前期)



(5) 楽浪彩笹塚の硯研台復元図

図10 韓半島の文具系遺物

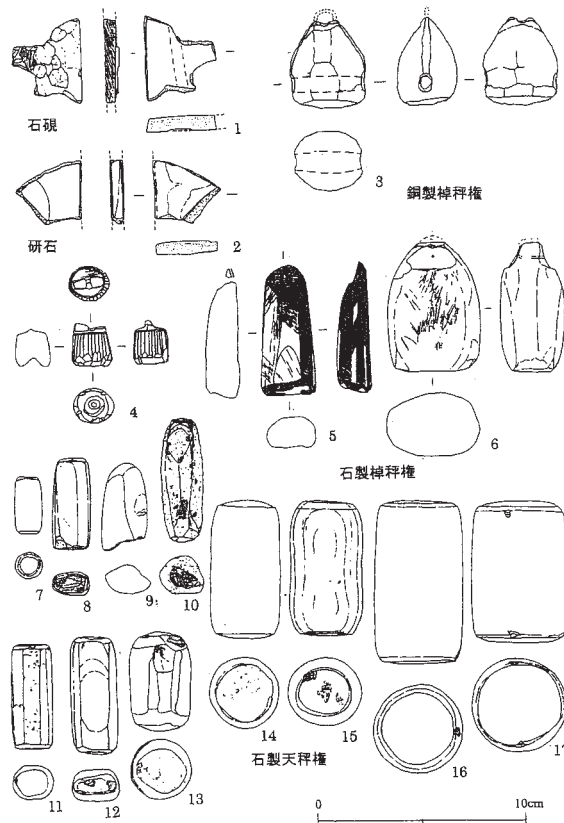


図9 伊都国の国邑と海村

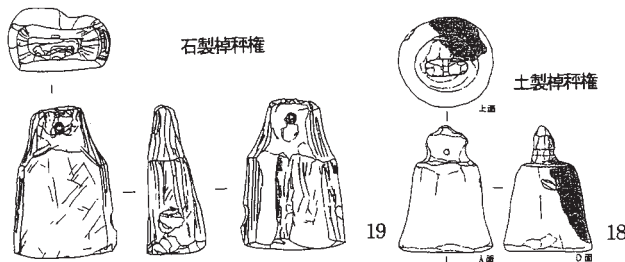
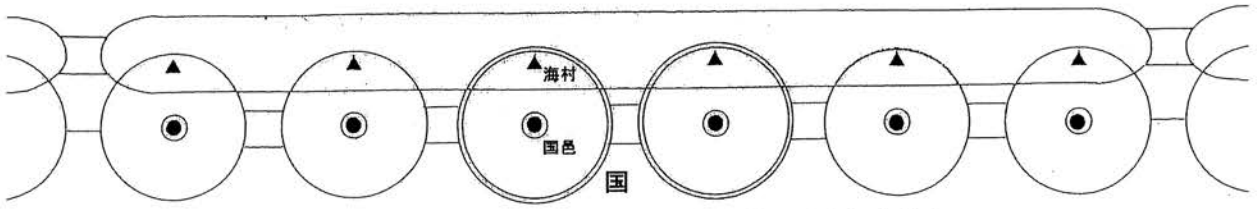


図11 弥生時代の硯と権 1・2 田和山 3 原の辻 4~6 青谷上寺地 7~17 亀井 18 古殿 19 比恵

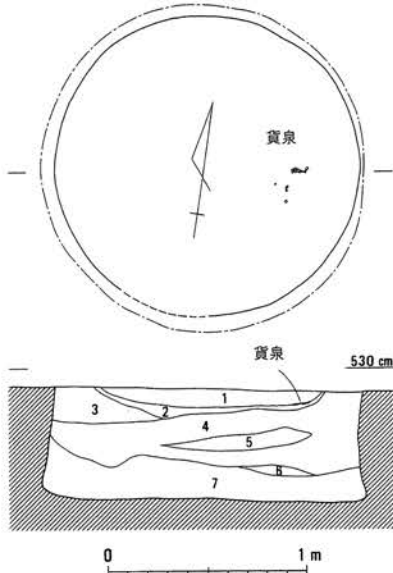


国々の連合体(地域政権)

図12 海村と国邑の関係模式図



図13 茶戸里遺跡の
中細形銅矛(左)と弥生土器(右)



- | | |
|-----------------|---------------|
| 1 黄褐灰色砂質土 (炭粒含) | 5 黄色砂質土 |
| 2 灰+焼土 | 6 黄色粘質微砂 |
| 3 淡褐灰色砂質土 (炭粒含) | 7 黄色砂質土 (炭粒含) |
| 4 黄灰褐色砂質土 (炭粒含) | |



図14 雲北里遺跡の五銖銭

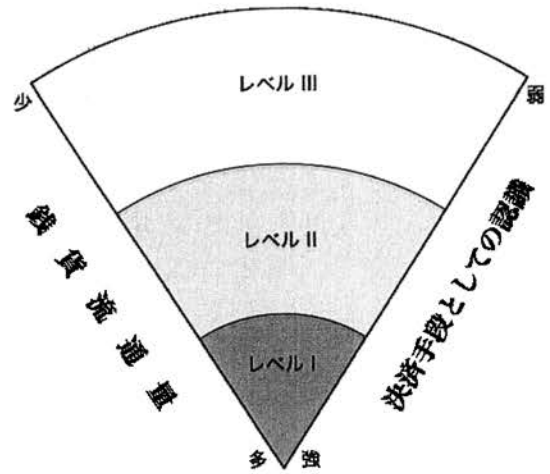


図15 東アジアの中世銭貨流通模式図

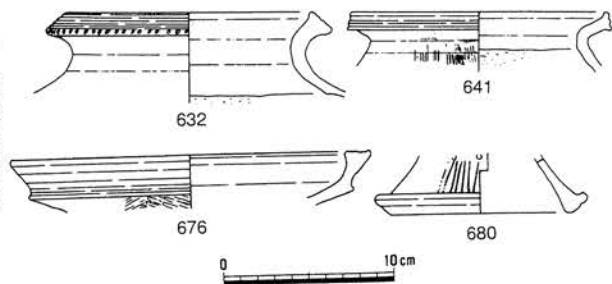


図16 岡山市高塚遺跡フロア区18号土坑の
貨泉出土状況と出土土器

一支国原の辻遺跡における交易

新幹線文化財調査事務所 安楽 勉

1. はじめに

玄界灘と対馬海峡の接点に位置する壱岐島は、『魏志』倭人伝に対馬島とならび「南北市糶」のしまと形容されたように、古くから海上交通の要衝として重要な地位を占めてきた。当時の航海術は地乗り航法と呼ばれる島々を目視しながらの航海で、その点では壱岐と対馬は安全なルートとして確保されたのである。現在の地勢を比較すると、対馬島は山が険しく耕地部は全体の1.4%と少ないのに対し、壱岐島は対馬島の5分の1の面積ながら、耕地率は30%と突出しており、自給自足のしさを印象づけている。

弥生時代の壱岐島をみても、そんな裕福な人々の暮らしが遺跡を通してかいまみえてくる。弥生時代の遺跡は約60ヶ所にのぼるが、そのなかで、拠点集落の代表的な遺跡が国特別史跡に指定されている原の辻遺跡であり、島北西部に位置するカラカミ遺跡と幡鉾川上流にある車出遺跡群の存在で、この独立した遺跡群は原の辻遺跡を頂点に連合体を築き、倭人伝に記された一支国を形成し対外交渉にも深いかわりをもつのである。

2. 原の辻遺跡の特徴

原の辻遺跡は昭和23(1948)年から26年にかけての東亜考古学会の学術調査をはじめとして昭和52(1977)年以降は県教育委員会、地元教育委員会による調査が現在も継続され、弥生前期末(紀元前3世紀)から古墳時代初頭(紀元後4世紀)に至る全貌が次第に明らかになっている。約100ヘクタールに及ぶ遺跡の中心は、幡鉾川下流の深江田原平野に南から北へ伸びる舌状の台地で、その周囲には三重の環濠が巡っている。出土遺物は数百万点にもおよぶ膨大な量で、九州北西部地域と密接な関係が認められる土器や石器等をはじめ、中国大陸や朝鮮半島系の多彩な遺物の出土は東アジアを含む交流・交易の密接さをうかがわせ一支国の王都にふさわしい内容である。現在これらの出土品は一括遺物として1,670点が国の重要文化財として指定を受けている。

3. 原の辻遺跡の誕生と成長期

遺跡の時代区分を示せば、原の辻遺跡が生活の場として定着するのは、弥生前期末のころからで、台地先端西側の部分に板付Ⅱ式土器が集中する。この時期の墓域も石田大原地区で確認されており、環濠の掘削もまだ始まっていない。また、最近の情報によると、さらに原の辻遺跡の西側、壱岐ライスセンターの近くからも同じような土器の出土があることから、関連性があるか、今後の進展に期待したい。

弥生中期になると生活の範囲は俄然広がってくる。生活用具の中心である土器は、須玖式土器が圧倒的に多くなる。なかでも対岸の糸島地方(伊都国)の土器が非常に似通っている。中葉以降になるとさらに糸島地域系統の土器は多くなり、壱岐は対岸からの移住説もあるくらいで、あながち一笑に付すわけにもいかないのである。中期の前半に台地の裾を巡る内濠・中濠・外濠の環濠が掘られ、内濠内には竪穴住居跡や、掘立建物跡などの遺構が数多く検出され、一番高い部分には祭儀場が設けら

れクニとしての体裁が整えられ一支国の中枢部となっており、外国との儀礼もここで行われたと思われる。また、シンボルともなった大陸のハイテク技術で築かれた船着場の出現は、中国や朝鮮半島のヒトとモノさらに情報の往来を加速させている。

4. 原の辻遺跡の繁忙と安定期

弥生後期になると、一時埋没していた環濠が再掘削され、低地部にも新たな濠が設けられ、防御域が拡大されている。それに伴って船着場も機能を失っていくが、台地西側に道路状遺構および柵跡が確認されており、ここは内海湾に注ぐ河口にも近く、船着場も築かれていた可能性が高い。ここを足掛かりに交易・交流は行われていったと思われるが、このころ中国では前漢が滅び、新王朝が起きるもすぐに後漢が成立する。しかし、このような変化があっても倭国としての対外交渉は続けられていく。

この時期中国と朝鮮半島から搬入された文物には、主にどのようなものがあるか見てみよう。甕棺の副葬品では大川地区で円圏文規矩鏡、獸帯鏡片、内行花文鏡片が、原ノ久保A地区では獸帯鏡片、長宜子孫銘内行花文鏡などの前漢末から後漢代の中国鏡がある。このほか鉄剣、鉄矛、鉄ヤリガンナ、鑄造鉄斧、板状鉄斧、鉄槌など朝鮮半島からの搬入品も多い。また楽浪郡を通して入ってきたものに楽浪土器をはじめ車馬具、円環形銅釧、権、大錢五十、貨泉などがある。

この時期は韓国慶尚南道泗川市に位置する勒島遺跡と密接なかかわりがあり、「勒島貿易」から「原の辻貿易＝三雲貿易」と呼ばれた一支国の全盛期にあたる。

5. 交流を物語る土器

まず、北から搬入された土器を見てみると、弥生前期末から中期後葉にかけて、朝鮮半島後期無文土器に編年される、口縁部を丸や三角形の粘土紐で飾った無文土器が主流をなし、そのあと擬無文土器が続くが、この擬無文土器は、朝鮮半島で無文土器を作っていた人たちが日本列島に渡来、移住して弥生社会に溶け込んでいく過程において作られた土器のことで、原の辻遺跡の不條地区でまとまって出土していることから、最初の渡来人やその子孫が集団で弥生人と生活し、船着き場や石積護岸の築造にも技術面で関わりをもち、いわゆる居留地の様相を呈していたのではないかと推測されている(宮崎 2008)。また逆に、朝鮮半島南岸にも金海市亀山洞遺跡をはじめ数ヶ所から弥生式土器が出土しており、ここにも交流の実態が浮かび上がってくる。

弥生後期の初めには楽浪系瓦質土器や遼東系の土器の存在もわかってきており、朝鮮半島の三韓系瓦質土器も多くを占めることから、朝鮮半島や中国系の人の往来もともにあったことがうかがえる。このころの交易体制は土器などの出土遺物から、交易従事者や施設に対しては特段の配慮がなされ、個々の交易レベルから、クニレベルの交易管理体制が敷かれていたのではないと思われる。

古墳初頭期になると韓国慶尚南道の馬韓系の土器や伽耶系の陶質土器も出土しているほか伽耶地域以外の全羅南道産も流入している。

原の辻遺跡出土の搬入土器の数量については2008年の原の辻遺跡調査事務所段階では総数が597点であったが、その後、2010年埋蔵文化財センターに移管して後、新たな出土遺物の見直しを行った。その結果、総数は1,000点以上に増加しているが、この数量はわが国の遺跡のなかで突出したものになっている。古澤はこの数字をもとに字図の上に各搬入土器の数字を落としている(古澤 2010)。これをみると、当初の無文土器の出土地は台地先端西側の低地で119点、台地中央を挟み西側低地23点、東側低地24点となっている。楽浪・遼東系土器は台地中央を挟み西側67点、東側48点、台地中央

20点と先に述べた台地先端西側低地部における居留地的状況を裏付けている。三韓系瓦質土器は台地先端で35点、台地中央を挟んで西側67点、東側128点である。東側に搬入土器が多い理由については、中枢地区の進入路がこれまでの西側から、内海湾奥の幡鉾川河口に直結した状況が考えられる。

遺跡の終末期に近い陶質土器の分布は台地西側先端が54点、その南側21点、台地東側53点、台地中央部が33点となっており、古墳時代初頭にかけても隆盛ぶりが目を引く。

搬入土器からみるかぎり、原の辻遺跡が交易の主要拠点となり、韓人・倭人が交易の担い手となっていったのであろう（白井2001）。

6. 原の辻交易の特徴

弥生時代前期にはまだ系統だった交易は行われておらず、弥生中期になると航海民的な集団が現れる。一支国の南北市糴の中心となったのは、水人(海人)の活躍によるところが大きい。倭人伝には「一海を渡る」とか「水行」・「船に乗って」と表現されているが、大型船の発見には至っていない。しかし、中国、朝鮮半島からの交易船は大型化していたと思われる。弥生時代の船は丸木舟の域を出ておらず、原の辻遺跡や、カラカミ遺跡の土器に櫂を持った船が描かれ、原の辻遺跡からは準構造船に似た長さ約57cmのミニチュア船が完形で出土している程度である。弥生中期以降は大陸性の銅鏡や銅剣などの出土例からして、交易物資も飛躍的に増加しているので、倭船も波除けの舷側板をもつ準構造船から古墳時代になると広い構造船に技術進化して、遠洋航海に対応していったと考えるのが流れである。

しかし交易については、誰もが自由に行えたのではなく、一支国や対馬国を中継ぎとして行われた交易は、北部九州の一定の影響下で運営されたと考えられ、韓国の勒島遺跡では弥生土器が多く出土していることから「勒島貿易」（白井2001）とし、原の辻遺跡が中継の中心となると「原の辻貿易」と呼ばれ、政治的交渉や威信財などの交易を行う楽浪漢人は伊都国の三雲遺跡まで伸ばしていることから、「原の辻＝三雲貿易」と呼ばれている（久住2007）。

7. 交易品の実態

原の辻遺跡の膨大な出土品は、その内容から弥生のデパートと称されたように、多種にわたるが、ここでは主なものについて触れてみよう。

まず、市の存在であるが、倭人伝には「国々に市ありて、有無を交易し、大倭をして之を監せしむ」とあり、国と国との交易が行われ、市が立ち品物を交換している様が描かれている。原の辻ではそれを裏付けるように、銭貨と権の出土がある。銭貨については先に述べた三種類のものがあるが、数量的には限られており、流通したかは疑わしい面もあるが、実物経済中心の段階からすれば、貨幣経済への移行は難しいところである。

権は、重量を測る秤に用いられた錘であり、日本では奈良時代以降、唐の度量衡制度をもとに整備された。原の辻遺跡出土の権は銅製で、高さ4.3cm、幅3.49cm、重さ150gで形状は釣鐘型である。上部には、ぶら下げるための半円形の紐を通す跡が残る。また体部下半には細い孔が貫通している。自然科学的な蛍光X線分析によると、銅98%、鉛1.7%でその他、ヒ素、銀、鉄をわずかに含むものの、ほぼ純銅であることが判明し、鉛同位体比法による産地の分析では、中国の華北地域に限定されることが分かった。おそらく権自体も後漢時代造られ、楽浪経由で弥生時代後期に搬入されたものと考えられる。しかし、150gという重さが後漢時代の度量衡制の単位と一致しないことから、定量の重り

を用いない筭秤に用いられたと思われる、市で使用された可能性が高い。

このほか、身近なものにガラス製品もあげられる。原の辻遺跡ではこれまで2千点以上のガラス製小玉などが墓地を中心に出土しているが、装飾品として重要な交易品を占めている。このほか紙面の関係で九州北部との交易実態が伝えにくい、伊都国や、奴国との交易は特殊な祭祀土器や銅矛などの銅製品などにみられる。

8. おわりに

弥生時代前期末に始まった大陸や朝鮮半島との交易は、壱岐という島国の特性をいかんなく発揮し、中継ぎ貿易という形で発展してきた様相が、対馬国や伊都国の遺跡の出土品から想像できる。その点では海の道というか海の高速度道を利用した、東アジアを視野に入れた国際的な交易拠点であったことを示している。しかしながら、「倭人伝ルート」から「博多湾貿易」と呼ばれたルートの変更は一支国の衰退にもつながってくるのである。

参考文献

久住猛雄 2007 「『博多湾貿易』の成立と解体」『考古学研究』53-4

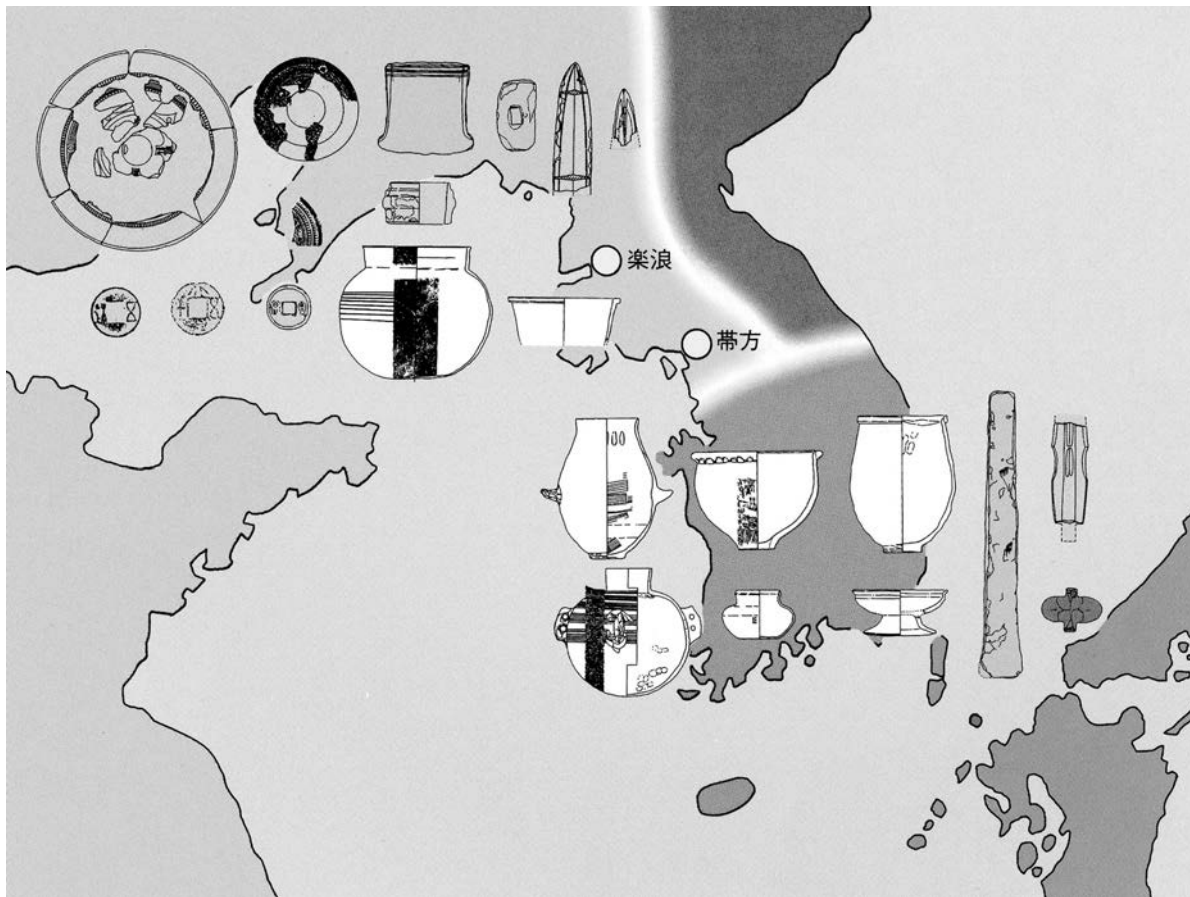
白井克也 2001 「靉島貿易と原の辻貿易」『弥生時代の交易—モノの動きとその担い手—』

長崎県教育委員会 2002 『発掘「倭人伝」海の王都、壱岐・原の辻遺跡展』

長崎県教育委員会 2005 『原の辻遺跡総集編』

古澤義久 2010 「壱岐における韓半島系土器の様相」『日本出土の朝鮮半島系土器の再検討』

宮崎貴夫 2008 『原の辻遺跡』日本の遺跡 32 同成社



講師プロフィール



たけ すえ じゅん いち
武 末 純 一

福岡大学人文学部 教授

1950年福岡市生まれ。九州大学大学院文学研究科修士課程修了（韓国・ソウル大学校大学院留学）。北九州市立歴史博物館、北九州市立考古博物館、福岡大学助教授を経て現職。現在、九州考古学会会長、九州古文化研究会代表、原の辻遺跡調査指導委員。専門は弥生・古墳時代の日韓交渉考古学と集落構造論。著作に『土器からみた日韓交渉』（学生社、1991年）、『弥生の村』（山川出版社、2002年）、「弥生時代の権」『福岡大学考古学論集』2（2013年）等がある。



クワン ウク テク
権 旭 宅

財団法人嶺南文化財研究院 研究員

1988年韓国・大邱市生まれ。嶺南大学校文化人類学科碩士（修士）課程修了。専門は中国古代貨幣。著作に『韓半島・中国東北地域出土秦・漢代貨幣の展開と用途』（嶺南大学校大学院碩士学位論文、2014年、韓国語）等がある。



あん らく ちとむ
安 楽 勉

長崎県教育庁新幹線文化財調査事務所

1946年宮崎市生まれ。別府大学文学部史学科卒業。39年間原の辻遺跡の調査研究に従事し、原の辻遺跡調査事務所長、長崎県埋蔵文化財センター東アジア考古学研究室長を歴任。専門は、縄文時代、弥生時代。著作に「日本列島の支石墓（長崎県）」『東アジアにおける支石墓の総合的研究』（1997年）、「倭人伝の道－対馬・一支国の港と道」『考古学ジャーナル』434（1998年）、「一支国における南北市羅の様相」『考古学雑誌』92-2（2008年）、「対馬国」『邪馬台国をめぐる国々（季刊考古学別冊18）』（雄山閣、2012年）等がある。



ふる さわ よし ひさ
古 澤 義 久

長崎県埋蔵文化財センター 主任文化財保護主事

1981年京都市生まれ。東京大学大学院人文社会系研究科博士課程修了。博士（文学）。専門は東北アジアの先史文化・中国貨幣。著作に「東北アジア新石器時代土器の交流」『韓国新石器時代土器と編年』（ジニンジン、2014年、韓国語）、「東北アジア先史時代偶像・動物形製品の変遷と地域性」『東アジア古文化論攷1』（中国書店、2014年）、「鷹島海底遺跡出土太平通寶についての一考察」『高野晋司氏追悼論文集』（2015年）等がある。

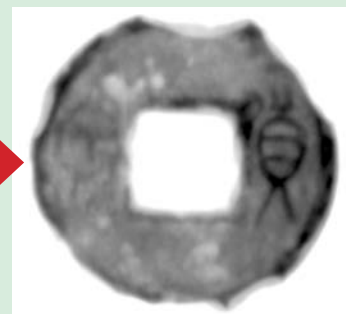
出土貨幣の判読作業



原の辻遺跡で出土した貨幣。肉眼では文字が読めません。



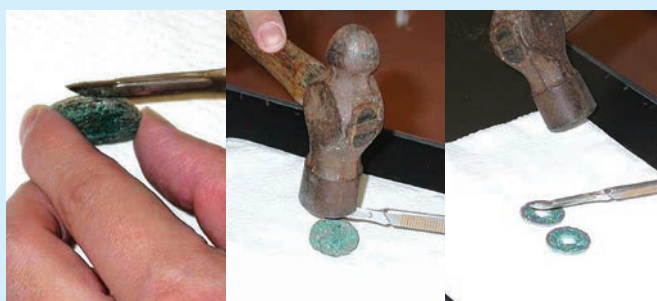
長崎県埋蔵文化財センターが保有する透過エックス線撮影装置（いわゆるレントゲン）で分析すると……



「貨」「泉」の字が解読できました！



肉眼で銭銘が読める貨幣も透過エックス線画像ではハッキリ字が読めます。



重なってくっついた状態で出土した貨幣は、メスなどで丁寧に はがして、透過エックス線画像などを基にサビ取りなどの処理が行われます。

平成 27 年度東アジア国際シンポジウム

ロード・オブ・ザ・コイン

— 弥生時代中国貨幣からみる交流 —

長崎会場

2015（平成 27）年 10 月 12 日（月・祝）
長崎歴史文化博物館 [1 階ホール]

壱岐会場

2015（平成 27）年 11 月 14 日（土）
壱岐市立一支国博物館 [3 階多目的ホール]

主催 長崎県埋蔵文化財センター

共催 長崎歴史文化博物館、壱岐市立一支国博物館

後援 長崎市、壱岐市、長崎市教育委員会、壱岐市教育委員会、魏志倭人伝のクニグニネットワーク参加教育委員会（福岡県教育委員会、佐賀県教育委員会、福岡市教育委員会、飯塚市教育委員会、春日市教育委員会、朝倉市教育委員会、糸島市教育委員会、宇美町教育委員会、唐津市教育委員会、神埼市教育委員会、吉野ヶ里町教育委員会、対馬市教育委員会）、朝日新聞社、長崎新聞社、西日本新聞社、毎日新聞社、読売新聞西部本社、壱岐新聞社、壱岐新報社、（株）壱岐日々新聞社、NHK長崎放送局、KTNテレビ長崎、NBC長崎放送、NCC長崎文化放送、NIB長崎国際テレビ、壱岐ビジョン